

地域を見つめ、地域を動かす

観光まちづくり

第5号

2025
November

特集

人と伝統の技でつくる観光まちづくり

北海道平取町
アイヌ文化が息づく観光まちづくり
—未来へつなぐ

富山県南砺市 城端・井波
越中の伝統文化を継承する
ひとづくり・ものづくり



2014.8.20

千々・フ



國學院大學 観光まちづくり学部



今だからこそ、
大切なこと。

AIやSNSなど科学やテクノロジーは進化し続け、
人や情報が世界中をスピーディに行き交う多様化した社会。
今、大切なことは変化に翻弄されることなく
自分を持つことではないでしょうか。
それは、この国の本質、日本人らしさを見据えること。
これこそが國學院大學の学びです。

もっと日本を。もっと世界へ。

 國學院大學

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 國學院大學 総合企画部 広報課 03-5466-0130
<https://www.kokugakuin.ac.jp>

観光まちづくり

第5号
2025
November

國學院大學 観光まちづくり学部

地域を見つめ、地域を動かす

観光まちづくり

- 3 巻頭インタビュー
「観光まちづくり学部」構想から完成年度までを振り返る
観光まちづくり学部長 西村 幸夫
聞き手 観光まちづくり学部 教授 浅野 聡
- 特集 人と伝統の技でつくる観光まちづくり
- 6 北海道平取町
アイヌ文化が息づく観光まちづくり—未来へつなぐ
- 14 富山県南砺市 城端・井波
越中の伝統文化を継承するひとづくり・ものづくり

第5回「観光まちづくりフォーラム」開催報告

- 22 第一部 全国の町並み保存活動に大きな影響を与える
観光まちづくり学部の取り組み
- 23 第二部 シンポジウム「多様なセッションが響き合う、観光まちづくり」
プレゼンター
青山 敦士 氏 全国の地方創生のモデルとなった離島ならではの活性化の
取り組み紹介
- 24 荻原 礼子 氏 市民参加で始まった歴史を生かしたまちづくりの取り組み紹介
- 25 高森 えりか 氏 郷土料理と特産物がキーワード 地元の当たり前が宝となる
取り組み紹介
- 26 パネルディスカッション

第11回～第13回「観光まちづくりカフェ」開催報告

地域連携最前線!

- 32 連携Ⅰ 学生目線で「温泉地・湯河原町への新しい人の流れをつくる」提案を(神奈川県湯河原町)
- 33 連携Ⅱ 持続可能な農業と観光の融合に向けて(宮城県大崎市)
- 34 連携Ⅲ 「蔵の街とちぎ観光まちづくりシンポジウム」を開催(栃木県栃木市)
- 35 観光まちづくりライブラリー

観光まちづくり学部 専任教員紹介

- 40 教員座談会
「デザインと観光まちづくり アートと観光まちづくり」
- 46 研究クローズアップ
「文化財を伝えることは地域社会を伝えることである」
下間 久美子 教授

地域と歩む博物館

- 50 Vol.9 陸前高田市立博物館
- 52 Vol.10 市立市川歴史博物館
- 54 観光まちづくり学部WEBサイト・観光まちづくり学部Xのご案内
観光まちづくり学部GUIDEBOOK 2025 全ページ公開のご案内

巻頭インタビュー

「観光まちづくり学部」 構想から完成年度までを 振り返る

観光まちづくり学部長
西村 幸夫



聞き手
観光まちづくり学部
教授
浅野 聡

2025年
度は、第1期
の卒業生を送り
出す「完成年度」とな
ります。観光まちづくり
学部の学びを構想し、一から
作り上げた過程を尋ねました。

「地域を見つめ、地域を動かす」 の誕生秘話

「浅野・西村先生は折に触れ、学部のキーマッセージ「地域を見つめ、地域を動かす」を口にしてきましたね。このコンセプトはどんな意図で生まれたのでしょうか。」

この学部は教員も学生も、文理融合です。「地域を見つめ」は、地域を分析して知る「文系の知」。そして「地域を動かす」は、地域をより良くするアクションに取り組む「理系の知」ということで、文理融合を地域に根差して表現したキーマッセージになりました。色々な表現を提案してもらって、教員み

んなでワークショップをして決めたんですね。これまでの観光は観光客や観光事業者の目線で語られることが多かったので、地域からという着眼点は新鮮だと思えます。

「浅野・キーマッセージには先生のまちづくりに対する姿勢がよく表れていますね。学部コンセプトの一つに「地域で出会えるワクワク感を大切に」という印象的な言葉があります。」

観光まちづくり学部の面白いところは、まず魅力に着目して、それを伸ばすことです。まちづくりの現場でも、先に地域の抱えている問題点ばかり言ってしまうと、気分が沈んでしまいがちです。まずは地域の良いところにフォーカスして、みんなでワクワクした気持ちから始めることで、前向きな取り組みにつながっていくので、こういう言葉を使っています。

学部の特色「演習科目」での 実践的な学び

「浅野・学部の専門教育で特に力を入れているのが、演習科目です。まず、1年生の導入ゼミナールの狙いを教えてください。」

大学教育では、1・2年生は大教室で教養科目を受け、次第に専門教育に移っていくのが一般的ですよ。ですが、それだけでは入学して間もない頃に居場所がなく、疎外感を抱く学生もいると思います。そこで週に1回は少人数の教室で担任の教員と対面して、仲間をつくり、所属意識を持てるようになることが大事だと考えて、導入ゼミナールを作りました。300人の学生に少人数教育を行うのは実践的

表紙の言葉

タイトル
平取のチセ・ブ(倉庫)

「あそこの山に穴が空いているだろう。オープンブリと言っ
て、夏至の日の太陽があ
の穴に落ちる」。沙流川
越しにそう解説してくれ
るのが、北大の辻井達一
先生。川を遡ると、昔、
ここまで津波が来たので
す、という説明はアイヌ
の人。繊細な着物の模様
、素朴な小屋だけではな
い、壮大な世界観がここ
平取にはある。

篠原 修(しのはら おさむ)
東京大学名誉教授

で、先生方の協力が不可欠なのですが、教員も学生と同じく1期生として来られた方なので、その意義をみんなで共有して始めることができました。

―浅野…これだけ少人数で丁寧な指導を受けながら、アカデミックスキルを学べる機会は貴重ですね。基礎ゼミナールはいかがでしょうか。

基礎ゼミナールは、大学の学びに期待して新鮮な気持ちで入ってきた1年生に、それぞれの先生の専門分野のエッセンスを体験してもらうために設けました。また、多くの先生の教えに触れてもらうために2ヶ月ごとの2チーム制にしています。

―浅野…基礎ゼミナールの説明会では、先生方が集まって1分間のプレゼンをする印象的な場面がありますね。行ってみたいくなる各地の良い写真を使いながら、バラエティに富んだ課題を出して、そこから学生たちが希望の課題を選びます。

教員は分野もバックグラウンドも違うので、互いに分かっていないことも多いわけですね。教員全員のプレゼンを聞くことで、学部の違いを教員自身も理解できる機会になっていると思いますね。

―浅野…続いて、学部の目玉である観光まちづくり演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの狙いは何でしょうか。

学びには一方通行の講義だけでなく、双方向のやりとりが必要だと考えています。学生が自分たちでやり遂げて、達成感を得られる。教員はそれを近くで見守って、良いタイミングで知識を与えて、責任を持ってサポートする。そういう教育のあり方が大事だと考えました。

また、社会に出ると、組織の中で協働することが

ドを持てることがありがたいので、それを次の世代に提供することがわれわれの責務だと思っていますね。

―浅野…連携協定の地域で、思い出に残っていることはありますか。

ゼミの学生を小さい集落に連れて行き、例大祭を見学する機会がありました。地域の人々が子供から大人まで、獅子舞を踊って氏子の家を回ります。われわれは最後の神社での奉納神事までずっとついていきました。

―浅野…先生がおっしゃる通り、お祭りは伝統行事として一番分かりやすく、地域にとっても重要なものですね。この学部では多くの教員がFD活動として共同で、主に連携地域を訪問しています。教員が地域に対する共通認識を持てる機会になっていますね。

―浅野…西村先生は若い時から、ずっと走り続けていますね。その原動力は何でしょうか。

基本になるので、その技術を身に付けてほしいとの思いがありました。私自身が前職の研究室のチームで、自分とは違う意見と直面することで、1+1が2以上になり得るとの経験をしたので、ここでもそれをやれないかと。グループワークでは、根拠を持って説得力のある説明をする、メンバーがまとまる。こうした合意形成の技術を身に付けた結果が、最終成果物にも表れてくると思います。

―浅野…演習科目の最後を飾る、3年生の専門ゼミナールと4年の卒業研究はいかがですか。

2年かけて、3年生の専門ゼミナールでは基礎的な研究の仕方をトレーニングして、4年生で卒業研究に取り組みます。また、アカデミックな説得力を持つことは前提としつつも、卒業制作や提案など、いわゆる論文に限らない幅広い成果を認めるのが特徴です。

―浅野…専門ゼミナールでは8割の学生が第1希望のゼミに配属されていて、他大学と比べても高い水準になっていると思います。また学部の主要施設である若木21の特徴として、専門ゼミや卒業研究の場である「演習室」が教員の研究室に隣接していることが挙げられ、ゼミの学生たちが居場所になっています。演習科目に重きを置く考え方が教室のレイアウトにも表れていますね。

―浅野…今年度はいよいよ、学部が始まって4年目の完成年度となりますが、いかがですか。

―浅野…今年度はいよいよ、学部が始まって4年目の完成年度となりますが、いかがですか。

―浅野…今年度はいよいよ、学部が始まって4年目の完成年度となりますが、いかがですか。

学部設立4年目の完成年度を迎えて

―浅野…今年度はいよいよ、学部が始まって4年目の完成年度となりますが、いかがですか。

―浅野…今年度はいよいよ、学部が始まって4年目の完成年度となりますが、いかがですか。

―浅野…今年度はいよいよ、学部が始まって4年目の完成年度となりますが、いかがですか。



地域の良いところに
フォーカスして、
ワクワクした気持ちから始める

もう一つは、ラウンジスタジオです。普通にスタジオを作ると閉鎖すると廊下が狭くなるので、3階と4階のエレベーターの前にラウンジを兼ねたオープンスタジオを置き、観光まちづくり演習を行うことにしました。来訪者や他の学年の学生も演習の雰囲気味わって来て、うまくいっていると思います。

―浅野…このラウンジの造りは、小中学校の開放型の教室であるオープンスクールに通じるように感じました。

連携地域をフィールドに 地域を見つめ直す

―浅野…学部の特徴として、観光まちづくりを実践している自治体と連携協定を結んで、授業などに協力していただいていることが挙げられます。今後の連携のあり方をどう考えていますか。

互いにとって良い関係を継続できると良いですね。第一には協定により、地域側がインターンやゼミを受け入れやすいという効果を期待しています。また、連携地域が若い先生方の研究フィールドになって、お互いのウィンウィンの関係につながっていくと良いですね。本学部の分野は、良いフィール

―浅野…学生もいいところに気づきましたね。教える側が面白くなさそうな顔をしていたらいけませんね。

特集地域 平取町と南砺市の文化の濃さ

―浅野…今号では北海道の平取町と富山県の南砺市を特集し、この2地域をつなぐテーマは「人と伝統の技でつくる観光まちづくり」です。この特集についてコメントをいただけますか。

どちらも、濃い所ですよ。平取町はアイヌ文化が濃い所。南砺市は合掌造りからお祭り、演劇まで、色んな文化がせめぎ合っています。「観光まちづくりカフェ」で大間町の島康子さんも「地方のほうが濃い」と表現しましたが(↓P31)、人間関係や文化の濃さが、地域のよりどころになっていくと思います。21世紀に選ばれる、文化的なトップランナーという意味で、二つの地域は似ていると思います。

―浅野…若い時に本多勝一さんの『アイヌ民族』という本を読んで、平取町のダム建設反対運動を知りました。「北海道」の名付け親である松浦武四郎は三重県松阪市出身なので、松阪市のまちづくりの一端で平取町に取材に行きました。南砺市の城端に初めて行った時も、なぜこの場所にこんなに立派なお寺と門前町があるのかと、インパクトが大きくて、忘れられないです。

どちらのまちも、忘れられがちな歴史を呼び起こしてくる、まちづくりの原点といったものを感じます。

(文責: 黒本剛史)



自分とは違う意見と
直面すること、
1+1が2以上になり得る



アイヌ文化を正しく受け継ぎ、未来へと伝えることをコンセプトとしている「二風谷アイヌ文化博物館」(P.8)の展示



アイヌ文化が息づく観光まちづくり

北海道平取町

つなぐ未来へ

人と伝統の技でつくる
観光まちづくり

アイヌ文化を学び、体感できる空間の「二風谷コタン」



主要な祭りや家庭での行事などで踊られるアイヌ古式舞踊

実際、平取アイヌ協会、平取町、国が協議を重ねた結果、アイヌの精神や文化を尊重しつつダム建設を進めるといふ、アイヌ文化環境保全対策調査に基づいた対策が実施され、日本で初めての枠組みが実現した。

また、復元された伝統的家屋のチセをはじめとする、アイヌ文化の振興・観光・交流の拠点である「二風谷コタン」の整備も、こうした協働の延長線上にある。コタン(集落)では建物の展示に加えて、5月から10月の週末には、アイヌの口承文芸「ユカラと語りべ」や、男女による手仕事の実演がチセの中で行われる。さらに、祭りやイベントの際には、コタンを舞台にアイヌ古式舞踊^{※3}が披露される。

語る、踊る、生きる

観光客に向けて披露されるアイヌ文化の実演は、単なる観光プログラムではなく、文化の伝承・発信の重要な場ともなっている。

この日の進行役を務めたのは、平取町二風谷アイヌ語教室の講師、関根健司さん。アイヌ語教室運営委員長の藤谷み子さん(P.11)と受講生の平村晴美さんが登壇し、約1時間にわたって沙流川流域に継承されるカムイユカラ(神謡)やユカラ(英雄叙事詩)が語られた。

町民は「平取アイヌ文化保存会」の活動にも積極的に参加し、アイヌ古式舞踊や伝統料理、儀礼・儀式などを学びながら、町内外のさまざまなイベントで活躍している。また、毎年8月に開催される一大行事「チプサンケ(舟おろしの祭り)」^{※4}も、町民主体で実施され、今年で第56回を迎える。このように、アイヌ文化は一部の専門家だけでなく、町民が担い手となり日常的に守り育てられている。



「ユカラと語りべ」の進行役の関根健司さん



アイヌ口承文芸を披露する藤谷み子さん(右)と平村晴美さん(左)

この日の進行役を務めたのは、平取町二風谷アイヌ語教室の講師、関根健司さん。アイヌ語教室運営委員長の藤谷み子さん(P.11)と受講生の平村晴美さんが登壇し、約1時間にわたって沙流川流域に継承されるカムイユカラ(神謡)やユカラ(英雄叙事詩)が語られた。

町民は「平取アイヌ文化保存会」の活動にも積極的に参加し、アイヌ古式舞踊や伝統料理、儀礼・儀式などを学びながら、町内外のさまざまなイベントで活躍している。また、毎年8月に開催される一大行事「チプサンケ(舟おろしの祭り)」^{※4}も、町民主体で実施され、今年で第56回を迎える。このように、アイヌ文化は一部の専門家だけでなく、町民が担い手となり日常的に守り育てられている。

※3 アイヌ古式舞踊
国の重要無形民俗文化財に指定されており、平取アイヌ文化保存会はその保持団体のひとつ。舞踊には、祭事における儀礼舞踊のほか、鳥や動物、自然の動きを模倣する模擬舞踊、遊び心を含んだ娯楽舞踊など、多様なものがあ

※4 チプサンケ
1970年代以降の恒例行事。かつてチプ丸木舟は、アイヌにとって主要な交通手段、漁猟道具であった。丸木舟の素材選定から製作、航行技術、祈りに至るまで、一連の文化を継承し、皆で楽しむ大きな祭りとして地域に定着している。



地域のアイヌ文化振興を熱く語る木村英彦さん

「萱野茂さん^{※1}たちが原告となった二風谷ダム裁判^{※2}のようなことが再びあつてはならない。新たに平取ダムを造る際には、チノミシリ(アイヌの祈り場)を国が勝手に削ることがないように、慎重な議論を重ねた」と木村さんは語る。

※2 二風谷ダム裁判
1997年、二風谷ダムの建設をめぐる裁判で、アイヌ文化への配慮や調査が不十分であり違法と判断された。この判決が初めてアイヌが先住民族と認められた事例となった。

平取町の日常に生きるアイヌ文化

新千歳空港から高速道路を南東へ約1時間。日高富川ICを下りて国道を北東へ向かうと、ビニールハウスや水田が広がり、平取町らしいのどかな風景

「平取町は昔からアイヌ民族と共に生きてきた歴史がある。だからこそアイヌ文化のまちづくりが、当たり前のように行われてきた」と話すのは、平取アイヌ協会会長の木村英彦さん。今日のアイヌ文化発信の中心地である二風谷の出身で、自治会長や町議会議員を務めている。地域、行政、研究機関との協働を大切にしながら、アイヌ文化の継承と発展に取り組んでいる。

※1 萱野茂
二風谷出身のアイヌ文化研究者、政治家。氏が収集したアイヌ民具の一部は、「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」として、重要有形民俗文化財(国)に指定されている。1972年に開館した「二風谷アイヌ文化資料館」(現「萱野茂二風谷アイヌ文化資料館」)の設立に携わり、1983年には「二風谷アイヌ語教室」(現「平取町二風谷アイヌ語教室」)を立ち上げるなど、アイヌ文化の保存・継承に尽力。1994年には、アイヌとして初めて国会議員となる。

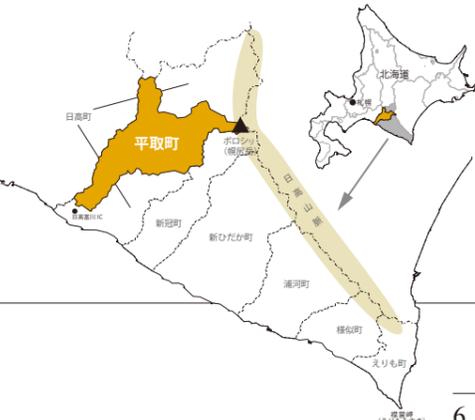
ちづくり

北海道の日高地方西部に位置する平取町の町名は、「崖の間(の地)」を意味するアイヌ語の「ピラウトゥル」に由来し、それに漢字が当てられたものである。町域の約86%は森林で、日高山脈を源とする沙流川が町の中央部を太平洋に向かって流れている。この町は、北海道のなかでもとりわけアイヌ民族の伝統が色濃く残る地域である。二風谷地区を中心に進められている、アイヌ文化の振興と観光まちづくりは次世代にもしっかりと受け継がれている。

構成・文=黄浩然
写真=白倉利恵、平取町、二風谷アイヌ文化博物館、南雲勝志
編集協力=平取町、二風谷アイヌ文化博物館
取材時期=2025年6~7月



(一社)びらとり観光協会



イザベラ・バード

イザベラ・バードは、19世紀に活躍したイギリス出身の旅行家である。1878年6月からおよそ3カ月をかけて、東京から日光、東北を経て、北海道へと渡った。その旅の記録は、自身の旅行記『日本奥地紀行』に詳しく記されている。

車のない当時、彼女は馬や徒歩で旅を続け、函館から室蘭を経由し、白老や平取などの集落を訪れた。

現在の日高町富川から平取へ向かう道は、出発してすぐに森林へと分け入る。沙流川にたどり着いたバードは、アイヌの少年を雇い、丸木舟で川を渡った。平賀、去場、荷葉の集落を通過し、平取へと進んだ。

平取では、コタンの首長ベンリウクの家で宿泊し、彼や地域の人びとから暮らしや生活道具についての聞き取りを行った。滞在中には、約300語のアイヌ語を記録し、さらに民具も購入している。これらの資料は、現在スコットランド国立博物館が所蔵している。

現在、バードの足跡をたどる解説サインが、平取町の紫雲古津川向大橋のたもとと義経神社の鳥居脇に設置されている。また、彼女が訪れた七飯町、森町、白老町、日高町などにも同様のサインが立てられている。



イザベラ・バード解説サインには、足跡が丁寧に紹介されている

年表

- 1946年：北海道アイヌ協会と同時に、平取支部も設立
- 1972年：二風谷アイヌ文化資料館（現萱野茂二風谷アイヌ資料館）が開館
- 1983年：平取アイヌ文化保存会が設立
- 1984年：アイヌ古式舞踊が重要無形民俗文化財に指定
- 1986年：二風谷ダム本体工事に着工
- 1991年：二風谷アイヌ文化博物館が開館
- 1994年：萱野茂がアイヌ民族初の国会議員になる
- 1997年：二風谷ダム判決で、アイヌが先住民族とされる
- 同年：いわゆる「アイヌ文化振興法」が成立・施行
- 同年：「沙流川流域における伝統的生活空間整備構想」に着手
- 2002年：「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」1121点が重要有形民俗文化財に指定
- 2007年：「アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観」が重要文化的景観に選定
- 2008年：イオル再生事業に着手
- 2013年：「二風谷イタ」「二風谷アットウシ」が伝統的工芸品に指定
- 2019年：二風谷コタン、平取町アイヌ工芸伝承館（ウレシバ）がオープン
- 同年：いわゆる「アイヌ施策推進法」が成立・施行
- 2024年：「匠と担い手の工房」完成



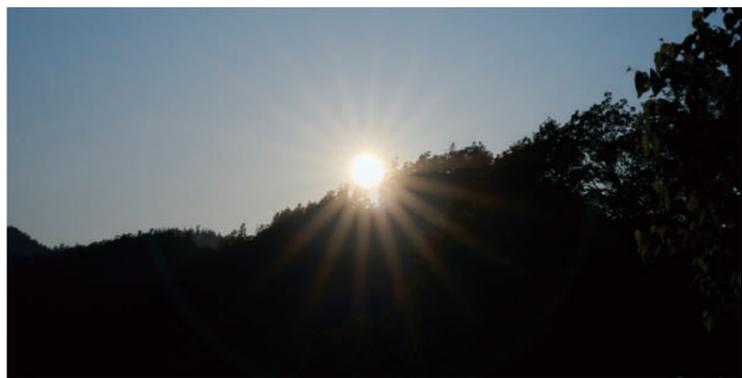
町の未来を語る遠藤桂一町長

を務めた経験を生かし、文化の継承と観光の両立に力を注いできた。町では1997年以降、「沙流川流域における伝統的生活空間整備構想」を推進してきた。この構想は、自然と人間の共生、多民族・多文化共生のモデル地域をつくることを理念としている。2008年からは、「イオル※4の森」「コタンの再現」「水辺空間」などの整備を進めてきた。

「この構想は、平取アイヌ協会などの地域団体が主体となり、町や国、関係企業と協議を重ねて実現した。その協力の輪の力が非常に大きかった」と遠藤町長は振り返る。長田さんも「こうしてアイヌ文化が再生・復興し、文化的景観の一部となった」と説明する。

現在、町では2007年度以降に順次選定されてきた重要文化的景観を拡充させ、第4次選定の申出に向けた作業が進む。「アイヌのイウオロを景観単位として、暮らしや生業、産業、文化振興の価値をさらに高めたい」と長田さんは町の文化的景観の意味を語る。

取材の日は、夏至を少し過ぎたころ。夕暮れどき、案内されたのは「オプシヌプリ（穴あき岩）」と呼ばれる場所。岩にいた穴の奥へと、夕日がびたりと沈む光景は、年に数日しか見られない。この場所には、アイヌの人文神・オキクルミの伝説も語り継がれている。現在では期間限定的な観光スポットとして人気を集め、文化的景観の重要な構成要素にもなっている。



夕日が岩穴に沈む自然の造形

沙流川と幌尻岳が育んだ文化的景観

自然と共にある折りの場

考古学を専門とし、これまで平取町で数多くの発掘調査に携わり、長年にわたって文化的景観の選定に関わってきた、二風谷アイヌ文化博物館・沙流川歴史館※1館長の長田佳宏さんは、平取町の文化的景観について次のように語る。

「太平洋から沙流川とその支流・額平川が平取町を貫き、日高山脈の主峰・ポロシリ（幌尻岳）の源までさかのぼる。この自然環境のもとで、平取町らしい『アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観』が育まれてきた」

長田さんはさらに「川の二股はアイヌにとって大事な折りの場。遠くにカムイの山、ポロシリを望む沙流川と額平川の二股こそ、その象徴」と熱を込める。



沙流川と額平川の二股。アイヌ語ではベテウコピで、「川がそこを互いに捨てる」ところを意味する。下流から上流を見るアイヌの考え方がうかがえる

イウオロや地名から見るアイヌの暮らし

沙流川流域を含む北海道の広い地域で、旧石器縄文時代以降の人々の暮らしの痕跡が確認されている。12〜13世紀以降になると、平地式住居や鉄鍋の使用が広まり、物質文化が変化する。やがて、近世後半のアイヌ文化に近い暮らしの形ができてきた。

著書に記されている。コタンの首長ベンリウクの家で宿泊したと

開拓がもたらした景観の変化

明治に入り、和人の入植が進むと農林業や牧畜、鉱業が発展し、平取の景観はアイヌのコタンを含む開拓地の風景へと姿を変えていった。特に軍馬生産に伴うハルニレなどの

近世後半のアイヌ社会では、「イウオロ」（生活の場）※2という空間認識に基づいた暮らしが営まれる。文化人類学者、泉靖一の調査によると、かつて沙流川流域には16のイウオロが存在が確認された。

現在の集落分布は、当時のイウオロと重なる部分が多く、世代を超えてこの地で暮らしが続いてきたことが分かる。現在も使われている、生活や環境と深く結びついたアイヌ語地名※3も、文化的景観の重要な構成要素である。

18世紀後半以降、幕府の蝦夷地調査員や旅行記作家等が沙流川流域を訪れ、当時のアイヌの暮らしや文化を記録している。1878年には、イギリス人旅行家イザベラ・バード

が平取に4日間滞在し、コタンの首長ベンリウクの家で宿泊したと



しなやかなハルニレと牧野林の風景をバックに立つ長田佳宏さん

牧野林の一部や、過放牧によって生まれ約15ヘクタールにおよぶずらん群生地は、今も町を象徴する風景として残っている。ずらん群生地に隣接する牧野に立つ、2本並んだしなやかなハルニレを前に「ハルニレは、アイヌの民具に欠かせない材料であり、伝承も多く残っている。その美しい姿はとても魅力的」と長田さんは特別な思いを語る。

文化の継承と景観の復興

かつて日本政府は、アイヌの伝統的な文化や生業に制限を加え、アイヌ語ではなく、日本語による教育を推し進めてきた。その影響は大きく、アイヌ文化の継承が困難な時期が続いた。しかし、1997年の二風谷ダムをめぐる裁判は、政策転換の大きな節目となった。

「施設の整備を進めて、観光客を呼び込む施策は進めたが、課題はアイヌ文化の継承だった」と語るのは、平取町長の遠藤桂一さん。町役場でまちづくり課長

※1 平取町の博物館 人口およそ4400人。現在の町に、アイヌの歴史や文化を学ぶための博物館施設が6つも存在する。沙流川流域の自然と歴史は、萱野茂さんが収集したアイヌ生活用具コレクションは、二風谷アイヌ文化博物館と「萱野茂二風谷アイヌ資料館」で展示されている。車で少し足をのばせば、「開拓財産展示施設」で近代開拓の歴史を学べる。「二風谷ダム展示室」や平取ダム管理棟内の「フカヒライウオロ・ビジターセンター」では、河川の管理とアイヌ文化の環境保全対策に関する展示が行われている。

※2 イウオロ コタンの暮らしに伴う生活領域をアイヌ語でイウオロという。生活の場、山奥、狩猟の場等と訳され、かつては日々の生活に必要な資源を得る空間であることと同時に、コタンの自治が行われた生活圏でもあった。

※3 アイヌ語地名 多くが土地の地形や特徴に基づいて名づけられている。例えば、去場は「ヨシ原・上手」、貫貫別（ぬきべ）は「濁る川」を意味する。また、動植物資源の分布を反映する名前も多い。例えば、シケレベは「キハダの実」を意味する。



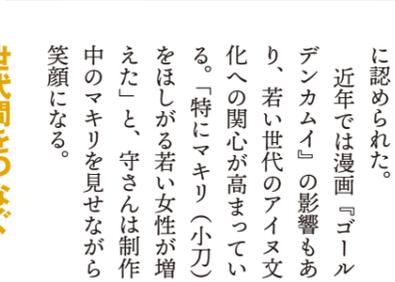
高野繁廣さん、啓子さん夫妻と作品。これまでの作品はスケッチですべて残している

野民芸を営む高野繁廣さん。
旅の途中で立ち寄った「貝沢民芸」でアルバイトを始め、東京にいた恋人（妻・啓子さん）を呼び寄せて、二風谷での暮らしが始まった。現在、啓子さんは刺しゅうの手わざを受け継ぐ工芸作家として活動している。
高野さんの工芸作家の道は、守さんの父であり木彫職人の貝澤守幸さんの下での修業から始まった。5年目のある日、師匠が43歳の若さで急逝。「一番記憶に残る出来事。今でも弟子のまま」と静かに語る。
今年の春、偶然立ち寄ったアンティークショップで師匠の作品であるシャック

シャイン像とおよそ60年ぶりに再会。迷わず買い求め、今は工房の中央に大切に飾られている。
伝統的儀礼の民具を復元
54年にわたり工芸品の制作に携わってきた高野さんは、伝統的な儀礼の民具の復元にも力を注いでいる。漆塗りのイクパスイ（捧酒箸）や儀礼用の刀、矢筒などを手がける際には、博物館が所蔵している資料を丹念に観察し、技法や意匠の研究を重ねている。
「儀礼を正しく継承するには、当時の作り方で再現した民具が欠かせない」との語り口に、アイヌの伝統文化を守る誇



貝澤守さんのマキリの作品と生み出す道具たち



昭和の好景気から現代への転換
1960〜80年代、北海道観光ブームに沸くなか、二風谷には数十ものアイヌ民芸品店が軒を連ねていた。「新婚さんが、個人タクシーで訪れるほどだった」と語るのは、木彫作家であり、現在「二風谷民芸組合」代表理事を務める貝澤守さん。
当時を懐かしむのは、工芸作家であり語り手でもある藤谷るみ子さん。「何を作っても売れた。とにかく売れるものを作って、と言われる時代で熱気がすごかった」と振り返る。

しかし、観光ブームの終息とともに民芸店の数は減り、「仕入れ品だけを扱っていた店は姿を消し、自分で作る人たちがが残った」とるみ子さんは語る。
アイヌ文化への関心の高まり
守さんも、そうした転換期を乗り越えてきた一人だ。21歳から39年間、アイヌ木彫り一筋に歩み続けてきた。観光の低迷期には、早朝5時に山へ入り、山菜やキノコを採っては生計を支えていたこともある。
「ようやく、自分の仕事に集中できるようになったのは、この20年くらい」と

語る守さん。転機となったのが、菅野茂さんが国会議員として成立に尽力し1997年に施行されたいわゆる「アイヌ文化振興法」であった。それ以降、アイヌ文化への理解が広がり、アドバタイザーとしての依頼も増えていった。
2013年には、「二風谷イタ（盆）」と「二風谷アットゥシ（樹皮の反物）」が経済産業省の伝統的工芸品に指定され、わざと文化の価値が公的に認められた。



アイヌの伝統的な文様を二風谷アイヌ文化博物館の展示物から学べる

近年では漫画『ゴールデンカムイ』の影響もあり、若い世代のアイヌ文化への関心が高まっている。「特にマキリ（小刀）をほしがる若い女性が増えた」と、守さんは制作中のマキリを見せながら笑顔になる。
世代間をつなぐ架け橋に
いわゆる「アイヌ文化振興法」施行以降、アイヌの文化継承に関わる人材育成を目的とする事業をきっかけに、アイヌ工芸作家を志す若者も増

えてきた。「若い人が文化を受け継いでくれるのは、私にとっての夢」と守さんは語る。
その一方で、「技術を受け継ぐだけでなく、暮らしとして続けられるかどうか大きな課題」と現実的な一面にも言及する。若手を支えるため、守さんはレザー彫刻などの新しい技術の導入にも前向きだ。「若者が自分の感性を活かしながら、本質を大切にしてくれるなら、それでいい」と、世代間の架け橋にもなるうとしている。
現在は、町がふるさと納税を活用して、工芸品を全国に発信している。これからは二風谷の工芸品のブランド化をさらに進めて販路を増やすことが、若手の未来をつくる道になるはずである。

りがにじむ。
また、平取高校では自ら教材を制作し、木彫りの授業を担当している。「孫に教えるみたいで面白いよ。昔は口伝えで習ったけれど、今は生徒のレベルに合わせて教材を工夫している」と言いながら目を細めた。
日々の営みとしての手仕事
アイヌの伝統的な手仕事は、木彫りを男性が、織物や刺しゅうを女性が担っている。多くの家庭では、こうした手仕事

かない」と語る、るみ子さんのものづくりへのまなざしは深い。
「私は80年代からずっと対面販売を続けてきたので、今でもお客様が店に来て、作品をどう使っているかを教えてくれる。それが何よりうれしい」と話す。一方で、「文様によって値段が違うから見積もりは出さない。値引きもしない」と職人としての誇りを貫く。
工房に掛けられたアットゥシは、染めに使う素材の一部を近くの植物から採り、それで手作りの糸を染め、織り上げた作品だ。なかでも、明るい藍染めの糸で織った作品は「るみ子ブルー」と呼ばれる。るみ子さんのわざと心を象徴している。

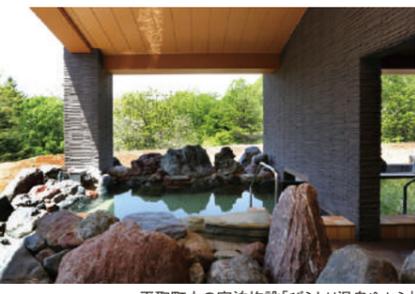
が日々の営みとして家計を支えてきた。「物心がつくころには、どの家もアットゥシを織っていた。私も小学校2〜3年生のころには糸を結び始めて、中学3年生のとき、母が入院したのを機に代わって織り上げた」。そう語るのは、藤谷るみ子さん。織物が現金に変わる体験が強く心に残り、それが織りの道を志すきっかけとなったという。
職人のまなざし、伝統の重み
るみ子さんは、35歳のときに菅野茂さんの妻、れい子さんから着物づくりを教わり、文様は木彫職人だった夫の藤谷憲幸さんから学んだ。「地元のアイヌ文様をきちんと守っていたい。小さな作品でも手を抜

きかなくていい。昔は口伝えで習ったけれど、今は生徒のレベルに合わせて教材を工夫している」と言いながら目を細めた。
日々の営みとしての手仕事
アイヌの伝統的な手仕事は、木彫りを男性が、織物や刺しゅうを女性が担っている。多くの家庭では、こうした手仕事



藤谷るみ子さんが誇りを持つアットゥシの作品

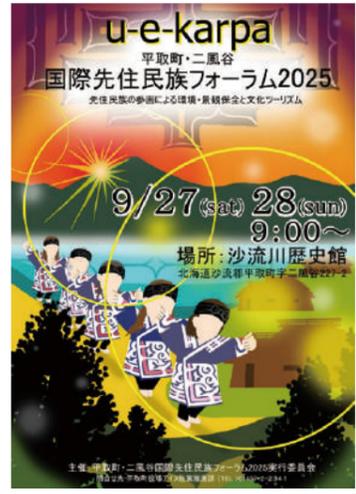




平取町内の宿泊施設「びらとり温泉ゆから」



ぬくもりの宿「ゲストハウス二風谷ヤマト」



平取町・二風谷国際先住民族フォーラムのポスター

未来へ つながる アイヌ文化

現代の感性に寄り添う工芸

2019年に完成した「平取町アイヌ工芸伝承館（ウレシバ）」は、アイヌ工芸

作家のわざを間近で見学・体験できる観光交流拠点であり、若手工芸作家の創作の場としても活用されている。

館内で丁寧な機織りを進めている柴田幸宏さん。もともとは調理師だった柴田さんは「木の皮から織物ができるのはかっこいい」と感じ、地域おこし協力隊として二風谷に入り、工芸作家の貝澤雪子さんと藤谷るみ子さんから技術を学んだ。「一番難しいのは糸づくり。2、3本



苦心の糸づくりを経てアットウシ織る柴田幸宏さん。光沢のあるジャケットとネクタイはかっこいい



ウレシバの屋外にはアットウシの原材料のオヒョウニレを煮る釜が設置されている

アイヌ工芸伝承館ウレシバでアイヌ文様オリジナルペンダントの組立体験も開催

以上切れると、もうどこが切れたかが分からなくなる」と苦笑いを浮かべる柴田さんだが、「糸づくりがうまくいけば、織りもスムーズになる」と手ごたえも語る。樹皮から繊維を取り出し、糸にし、織物に仕上げるまでには、膨大な手間と時間がかかる。

完成した織物は、スーツやネクタイ、ベストなど、現代の暮らしに溶け込む新たな作品として生まれ変わる。フォトグラファーの白倉利恵さんのカメラストラップも柴田さんの作品だ。「伝統の素材を、日常で使えるものにした」。技術を受け継ぎながら、現代の感性に寄り添う工芸作家を目指している。

サルンクルとしての文化継承

2022年、二風谷に「イオル文化交流センター」が開館した。イオル散策や山菜採りなど、体験型の文化交流を提供する拠点であり、平取町アイヌ文化振興公社の事務所も置かれている。

ここで働く20代の原田啓介さんと梨乃さん夫妻が、アイヌ音楽イベント「ウレク」の準備に奔走していた。梨乃さんは二風谷出身。子どものころからアイヌ語教室に通い、踊りや歌に親しみながら育った。「アイヌ文化は暮らしの中にあるもの」と語る。

一方で札幌出身の啓介さんは、「アイヌ文化は教科書の中の遠い存在だった」と振り返る。二人の出会いには、札幌大学の「ウレシバクラブ」。講義以外でもアイヌ語や歴史



これからもっとアイヌ古式舞踊を学びたいという加藤優那さん

アイヌ文化を学び続ける

若い世代の加藤優那さんまた、アイヌ文化に魅了された一人だ。小学校2年生から中学3年生まで、毎週関根さんのもとでアイヌ語を学んできた。「かるたなどゲームを通して楽しく学べた」と笑顔で振り返る。

平取から町外の高校に通い、就職も平取町の企業に決めた。ずっと地元とのつながりを持ち続け、平取アイヌ文化保存会に参加する予定だ。「踊りが大好きで、

未来へ向かう 観光まちづくり

先輩たちからもっと学びたい」と力強く語る。「アイヌ語や文化を継承しなければ、やがて失われてしまう」と危機感を抱きつつも、「日本中でアイヌ文化に関心を持つ人が増えて、文化が受け継がれていくとうれしい」と笑顔を見せた。

「まちづくりには人材の育成が欠かせない」と遠藤町長。平取高校の存続を重視し、アイヌ文化の授業を導入し、海外との交流も広げ、町外からの生徒のための学生寮の整備も進めている。

現在、町では二風谷を中心に観光まちづくりを進めているが、「町全体の魅力を発信し、地域再生につなげたい。訪れる人には、もっと深くアイヌ文化に触れてもらいたい」と遠藤町長は展望を語る。将来的には、平取町全域の文化観光資源を再発見・整備し、全体を「エコミュージウム」として捉える構想も着実に進ん



沙流川の風土から生まれるびらとりマトは甘さが特長。「ニシバの恋人」のブランドで人気のマトジュース



一方で木村英彦さんは、「多くの観光客を呼ぶよりも、コタンでゆったりと時間を過ごし、文化を体験してもらえたい」と話す。

そして、2025年の9月には、6年ぶりに「平取町・二風谷国際先住民族フォーラム2025」が開催される。遠藤町長は「世界の先住民族と交流できるこの機会を未来の観光まちづくりに大きなヒントをもたらす」と期待を寄せる。今年のテーマは「先住民族の参画による環境・景観保全と文化ツーリズム」。アイヌ文化の未来と、地域の新たな可能性が、ここからさらに広がっていく。

近代開拓民とアイヌ文化の風景が織りなす文化的景観

観光まちづくり学部 教授 南雲勝志

史を自主的に学ぶ学生団体だ。関根健司さんからアイヌ語の指導を受け、啓介さんはアイヌ語弁論大会の優勝者でもある。公社では、全国の大学生・大学院生を対象とした「大地連携ワークショップ（びらとり）」を年2回開催している。遠藤町長は「平取を訪れた学生の中には移住者もあり、将来のアイヌ文化継承の担い手の発掘につながっている」と、その意義を評価している。

二人は仕事以外でもアイヌ語教室の運営に携わり、今年で4年目となる。「教材で読む・書くことは学んでも、話すのは難しい。話し相手がいないと、なかなか使う機会がない」と、梨乃さんはアイヌ語継承の難しさを語る。

二人の活動の原動力には明確な思いがある。「アイヌ文化は、アイヌのルーツを持つ人が担うのが一番だと思う。自分の役割は、次世代への橋渡し」と啓介さん。

そして梨乃さんは「大切なのは、アイヌかどうかよりも、サルンクル（沙流川の人）として共に文化を守っていくことだ」と力を込める。



共にサルンクルの文化を守る原田啓介さん、梨乃さん夫妻

初めて二風谷を訪れたのが2011年の春先だった。アイヌ集落の展示場だった二風谷コタンで最初に目に留まったのは、「クチャ」と呼ばれる狩猟のための仮小屋だった。簡素な中にもづくりの精神が宿り、博物館に展示されている狩猟道具や獲物を捕る罠と共に、アイヌ民族のものづくりの技術の高さに圧倒された。二風谷コタンはその後、東京大学名誉教授篠原修先生の指導で再整備され、展示場からアイヌの集落と広場で構成される交流の場となり、さまざまなイベントで活用されるようになった。



アイヌの仮小屋「クチャ」屋根には枝や葉を置き、雨風をしのぐ



サイロや畜舎が点在する平取町芽生（めむ）地区の文化的景観



富山県南砺市 城端・井波

越中の

伝統文化を継承する

ひとづくり

ものづくり

富山県西部を流れる庄川の扇状地には、清々しい空と豊饒の大地、屋敷林に囲まれた農家が点在する「散居村」など、思わずため息が出るような美しい風景が広がっている。南砺市城端・井波はこの砺波平野に息づくまち。いずれも浄土真宗寺院の門前町として開け、城端は絹織物、井波は木彫りの地場産業を育み、発展してきた。そして今、古き良き伝統文化とものづくりを守りながら、時代に合った観光まちづくりが進められている。



富山県南西部、庄川流域の扇状地に広がる砺波平野の散居村風景（写真：岩倉竜矢）



城端と井波の概要

○情緒豊かな「越中の小京都」、城端

砺波平野の南端、五箇山の入り口にあるまち。古刹・善徳寺の寺内町として栄え、格子戸の町家や古い蔵、石畳の通りや細い路地が残し、情緒あふれる町並みが広がっている。江戸時代、加賀藩の庇護のもとで絹織物業が始まり、明治期まで主要産業として栄えたが、現在は1企業だけが残し、伝統の「城端絹」を守っている。また、ユネスコ無形文化遺産に登録されている春の「城端曳山祭」は、約300年の伝統を誇る優雅な祭りとして見る人を魅了している。

○日本一の木彫刻のまち、井波

名刹・瑞泉寺から開けたまち。その瑞泉寺が1762（宝暦12）年に火事で焼失。再建のために京都から彫刻師・前川三四郎を招き、地元の宮大工がその技を継承したことから、井波彫刻が知られるようになった。その後は寺社彫刻だけでなく、欄間や建具などの建築彫刻も手掛けるようになり、現在は約200人の彫刻師のほか、建具屋、塗師屋、木地屋などが在任して井波のものづくりを支えている。まちを歩けば、あちこちからトントンと鑿と木槌の音が聞こえ、木の香りが漂ってくる。



井波の名刹、瑞泉寺山門の見事な木彫刻



井波の町中では井波彫刻を間近に見られる



南砺市の観光情報サイト 旅々なんと

クレジット
構成・文：岡崎あづさ
写真：室澤敏晴 写真提供：山口誠、島田優平
編集協力：一般社団法人 城端景観・文化保全機構、
一般社団法人 ジンウラボ

城端

善徳寺と 絹織物が 育んだまち

善徳寺は地域住民の心の拠り所

朝、善徳寺には心地よい風が吹いていた。境内は、参拝と法話の聴講を終えた人や散歩で立ち寄った人が行き交っている。山門の前ではゴミ拾いをする人も見

利活用の幅を広げていく

善徳寺では、住民にも観光客にも身近な存在であり続けたいという思いから、開かれた寺であることを重視している。本堂への出入りは、日中は誰でも参拝自由。宿坊は1年中、開放しており、大学生の合宿や社会人グループ、観光客など、

かける。

城端別院善徳寺は今からおおよそ550年前、蓮如上人によって開基された浄土真宗大谷派の古刹。幕末、住職が不在になったおおよそ60年間は住民が協力して維持管理し、明治期の城端大火では、住民総出で山門に迫る火の粉を振り払い、延焼を防いだという歴史もあり、今も昔も地元住民に深く愛され、親しまれてきた寺だということが分かる。

年間800人ほどが宿泊している。近年は海外からの旅行者も増え、まちを歩き、地元の飲食店で夕食を食べ、宿坊で素泊まりを楽しんでいるという。

また、大広間は地元の集みや納涼祭、収穫祭など、イベントスペースとして貸し出している。最近では、本堂や寺内を見学した後、腕輪念珠づくりを楽しむ体験ツアー（要予約 4500円）も実施。

女性観光客に人気だそう。

「地域住民の心の拠り所としてこれからも気軽に利用していただきたいし、観光客の来訪も増やしていきたい。まちづくり協議会とも情報共有しながら、PRに取り組んでいきたいと思っています」と輪番（東本願寺別院の役職）の亀淵卓さん。今後は、南砺市内にある他の寺院との連携も考えているそう。



ユネスコ無形文化遺産登録の城端曳山祭の山車



1



3



2



5



4

1 城端別院善徳寺山門（富山県指定文化財）
2 善徳寺輪番の亀淵さん 3 7月の虫干法会では蓮如上人ゆかりの品々や前田家の宝物などが公開される
4 善徳寺には柳宗悦、棟方志功も滞在。柳の「美の法門」もここで書かれた
5 庫裏（寺の厨房）には炊き出し用の竈（かまど）が健在

城端の絹織物は今からおおよそ450年前、養蚕が盛んな五箇山から生糸を仕入れて織物を作るようになり、発展してきた。しかし、戦後は化学繊維の普及などにより衰退。今は、老舗の松井機業だけが昔ながらの製法で、城端絹を作り続けている。

現代にマッチした絹織物を提供



⑧絹織物のもとになる繭
⑨玉糸の糸繰り作業
⑩衣服や生活小物、特注インテリアまで多様な絹製品を製造している
⑪松井機業6代目社長の松井さん
⑫旧城端織物組合の建物を交流施設“SHAREじょうはな織館”として再生



今年5月には、かつて城端織物組合の事務棟だったレトロな建物を交流施設“SHAREじょうはな織館”としてオープンさせた。「使い手がいなければ取り壊しになると聞き、思い切って手を挙げました。クラウドファンディングで修繕費を集め、カフェとワークショップス

ショールームで販売するほか、東京の展示会にも出展した。観光需要にも対応し、工場見学も実施している。

6代目社長の松井紀子さんは、東京の大学を卒業して証券会社で働いていた時、父と一緒に得意先を訪問。そこで初めて絹織物の美しさと可能性を感じ、家業を継ぐことを決めた。「絹は肌に優しく、紫外線をカットし、調湿効果もある素材。自分も作ってみたいと思いました」と松井さん。2012年には現代のライフスタイルに合った商品開発に着手。ホームウェアや枕カバー、タオルなどを商品化した。

約450年ぶりに復活した市

城端には、善徳寺の町立でとともに「とうじん見世」が立った歴史がある。往時、朝市では大勢の人が野菜や米、衣類、生活道具などを持ち込んで売り、買い物客で賑わった。しかし、まちが整備されるにつれ、実店舗ができ、市は消滅していった。

発起人は呉服店主の清部一夫さん、飲食店主の澤田謙二さん、和菓子店主の安居博さんの3人。「当時はコロナ禍で人間関係が疎遠に

の時を経て、善徳寺前のえびす駐車場に甦った。開催は3月下旬から11月初旬の毎月4、10、14、20、24、30日。6時半から7時半頃までお菓子やコーヒー、総菜などを販売している。

そんな市が2022年春、約450年の時を経て、善徳寺前のえびす駐車場に甦った。開催は3月下旬から11月初旬の毎月4、10、14、20、24、30日。6時半から7時半頃までお菓子やコーヒー、総菜などを販売している。

約450年ぶりに復活した市

ペースを整備しました。誰でも気軽に来て、地元の人と語り、普段着の城端を知ってもらえる場所にしたと思っています」と松井さん。今後もイベントや教室など、様々な場を提供しながら、城端絹のファンを増やしていきたいそうだ。



⑬



⑭

⑬呉服店と不動産業を営む清部さん
⑭野菜や料理、工芸品などの作り手が集まる城端の市“とうじん見世”



①四つの蔵が連なる城端の町並み
②木彫・漆芸・金工・染織工芸の粋をこらした曳山
③常設展示の曳山と館長の山下さん

刻などの匠の技が凝縮されている。曳山と共に、情緒豊かな庵唄を披露するのもこの祭りの魅力だ。庵屋台から響く庵唄は、江戸端唄の流れを汲む粋なものである。当時、城端の商人が絹織物を売り歩いた京都と江戸、二つの文化が融合しているのが特徴だ。

城端曳山会館では曳山を常設展示し、ビデオも放映。また、伝統芸能会館“じょうはな座”では庵唄の定期公演を行い、祭りの臨場感を観光客にアピールしている。だが近年は、後継者不足の問題がある。「曳山の曳き手と囃子方の継承が課題です。曳き手は最近、城端と交流のある名古屋市の名城大学の学生に参加してもら

京都と江戸の文化が融合した祭り

城端のもう一つの顔と言えるのが、春の曳山祭だ。江戸中期、伝統産業の絹織物業が低迷した際、商売繁盛を願って京都祇園祭の山鉦を模した曳山を造ったのが始まり。城端塗や加賀友禅、井波彫り

粋な文化を

引き継いでいく

美しい町並みと曳山文化を残し、観光誘致につなげたい。そのような思いを体現した住民主体の活動が注目を集めている。城端景観・文化保全機構の代表理事・松平保夫さんは、空き家を生かしたまちづくりと市街地活性化に取り組んでいる。松平さんは、道路整備で沿道の家屋が壊れたり、人口減で空き家が増えたりしたことで、曳山祭に祝儀を渡して庵唄を聴く「所望宿」が減ったことを憂慮。2013年、城端が県の定住・半定住促進事業のモデル地区に選ばれたことを機に、知人と共

同で大工町の空き家を購入。『じょうはな庵』と名付け、所望宿を復活させた。「間口二間、中庭のある城端特有の住居を残し、まちの賑わいの拠点にしたいと思いました」と松平さん。

2年後には、東京の有識者も含めた17人で一般社団法人を立ち上げ、補助金を活用し、空き家再生プロジェクトを本格稼働させた。2016年には「荒町庵」の翌年には「東町庵」を開設した。運営資金を確保するため、荒町庵は民泊施設として運営。東町庵は住民の公民館として開放している。

「民泊施設の荒町庵は、『城端の暮らしに触れることができる』と観光客に好評です。3軒ともさらにPRに力を入れ、若い人たちの集まりや習い事、イベントなどに使ってもらえるといいですね。城端に愛着を持ってくれる人が一人、二人と増えていけば……」と松平さんは展望している。



④



⑤



⑥

④京都や江戸の茶屋を模した庵屋台。所望宿の前に留まり庵唄を披露する
⑤公民館として、また祭りの庵唄を聴く所望宿として再生した“じょうはな庵”
⑥城端景観・文化保全機構の代表理事・松平さん
⑦45人の出資者で支える民泊施設の“荒町庵”。宿泊客も曳山祭の庵唄を所望できる

井波

進化するまち

伝統文化を 守りつつ、



島田木材の社長でもある、ジソウラボ代表理事の島田さん

まちをつくる人をつくる、 「ジソウラボ」

井波の人口は約8000人。うち200人以上が木彫刻に携わっており、瑞泉寺につながる八日町通りは彫刻工房や町家が軒を連ね、七福神や十二支などの木彫が飾られるなど、さながら木彫刻美術館のような町並みが広がっている。

2018年には日本遺産に認定された。これは寺や建物が認定されたのではなく、このまちに来た彫刻師・前川三四郎が文化の源泉となり、人を呼び込みながら日本一の木彫刻のまちをつくってきた所産が認定されたもの。一人の優れた才能が文化を醸成し、時代を拓いてきたのである。

そんな日本遺産認定を受け、新しいまちづくりを仕掛けていこうと立ち上がったのが、異業種グループ「ジソウラボ」だ。「まちをつくるのは人。前川三四郎のように新しい文化を担う人を育てようと、仲間



①井波のシンボリック存在の瑞泉寺
②前川三四郎による瑞泉寺山門正面木彫、唐狹門雲水一匹龍
③彫刻工房の町家が連なる井波の町並み

並みが自慢だ。だが、その陰で多くの町家が空き家化し、2020年の調査では空き家率10%超と深刻だった。2020年に家業の小西不動産を継いだ小西さんは、空き家問題の解決に挑むことを決めた。

「これまで空き家は解体して更地にして売るのが常でした。でも解体費が高く、土地価格を上回るケースが多いので、所有者は損してしまふ。また、解体して更地が増えると、町並みが歯抜けのようになって井波らしさがなくなってしまう。町家が風景と一体になっているのが井波の良さだから」と小西さんは話す。

「アキヤラボ」で空き家率改善

そこで小西さんは、長期間、空き家になっっている町家の所有者に「壊さずそのまま売却する」ことを提案。若い人が安価で購入し、リノベーションして店舗や住居に活用できるシステムを構築した。例えば、50万円でも売れる

④不動産業を通じて井波に合う人のマッチングを手掛ける小西さん
⑤山川さんがリノベーションした6棟ある「Bed and Craft」のフロント兼ラウンジ



⑤

い空き家は「月2万円改修可能な賃貸契約にして、3年後には譲渡」という条件にすると、すぐに借り手が見つかったという。

2020年夏には南砺市空き家対策推進委員メンバーの井波担当、井波地域まちづくり協議会と共に地域団体「アキヤラボ」を創設。空き家の相談窓口と、ジソウラボが支援する創業・移住希望者の相談窓口を一手に引き受け、マッチングを促していった。2年後には法人化して公益性を持たせ、地域の情報を一元化することでマッチングが加速し、3年間で70軒以上の空き家の売却・賃貸契約が成立した。

「面白い人が集まってきましたよ。創業者同士がコラボしてオリジナル商品をつくったり、若い女性が自宅ガレージでマルシェを開いたりしています。今後もこのまちに刺激を与えてくれる人を誘致していきたいですね」と小西さん。長い間眠っていた幾つもの空き家に新しい風が吹き込まれ、まちに好循環が生まれている。

井波の暮らしを 楽しむ宿を提供

ジソウラボのメンバー・山川智嗣さんは建築家。大学で建築を学んだ後、東京で就職。その後カナダに留

7人で発足しました」と代表理事の島田優平さん。地元で森林経営や製材を担う島田木材の社長である。メンバーの職業は石材店経営、建築家、エン지니어、彫刻師、IT関係など多彩だ。

移住から開業まで全面支援

2018年に始動した人材育成プロジェクトでは、パン店やコーヒーショップ、ブルワリーなどの起業家を募集。人材が決まるとメンバーが各々の人脈、職能を生かし、空き家の仲介、ビジネス戦略、助成金の申請、店舗設計、広報活動などをサポートし、開業までの道筋をつないでいく。

第1号のパン店には、都内でパン職人として働いていた若夫婦を招いた。井波に移住して、自力で開業してもらおうではなく、準備期間の就労を支援し、テスト販売してPRするなどのバックアップ体制を構築し、開業までしっかり伴走していくのがジソウラボの特徴だ。これまでに5店舗の開業をサポートし、現在も飲食や地域モビリティの事業希望者を募集している。

「昭和風情が残る町家をリノベーションし、若い移住者が店舗経営という形で新たな命を吹き込んでいく。そんな店が何軒かでき、まちの雰囲気が変わってきたことを実感しています。今後も元々いる人、外から入ってきた人、出たり入ったりする人など全部を巻き込みながら、まちを元気にしていきたいですね」と島田さんは話す。



⑥



⑦

土産に持ち帰ることも可能だ。「目指しているのはパッケージングスタイル。まちの人とゆつくりと語り、暮らししているような感覚を味わってほしいと思っています」と山川さん。

そんな井波の日常が体感できる宿は人気を呼び、翌2017年には2棟目が完成。現在までに、規模や趣向の異なる6棟が完成している。経営はオーナーシップ制度を採用し、県外の旅行会社や実業家に購入してもらい、山川さんの会社が運営管理する形をとっている。

空き家の ビジネスモデルを確立

若い移住者を呼び込み、新たな文化を創出する。そのような「ジソウラボ」の取り組みを、空き家活用の観点からサポートしているのが小西正明さんだ。小西さんは井波で不動産業を営み、深刻化する空き家問題を解決しながら地域活性化を図るビジネスモデルを確立している。

井波は古き良き町家が連なる美しい町



(右) ジソウラボが誘致した最初の店舗の「バイカースハウス Kubota」オーナーの窪田夫妻



⑧「Bed and Craft」を企画設計・運営管理する建築家の山川さん
⑦「Bed and Craft TAÉ」はこの空間のために制作された漆芸家田中早苗さんの作品を展示
⑧「Bed and Craft KIN-NAKA」では彫刻師 前川大地さんの作品を展示

城端・井波

城端・井波ともに広域連携に参画し、次世代への活力を高める

広域観光で新たな生業づくり

これまで紹介した通り、城端、井波では伝統文化の継承や人材育成に向けた取り組みが活発化しているものの、近年は人口減少が深刻化している。こうした状況をふまえ、まちづくりの担い手たちは「まちの持続・発展には広域観光による交流人口や、多様な形で地域と関わる関係人口の増加が必須だ」と考えている。

越中、富山県南砺市の各町村は、古くより金沢や京都、江戸などに伝統のものがかりを届け、栄えてきた。近年は、白川郷と五箇山、城端が「世界遺産バス」で結ばれており、JR城端駅からは「南砺金沢線バス」が繋がっている。バスアクセスと鉄道を絡めた広域連携を推進し、交流人口や関係人口を増やしていくことは、移住者、起業家による新たな生業とまちの活力を生み出す観光まちづくりの重要なポイントと言えるだろう。



長年、城端のまちづくりに関わっている山口さん



金沢・高岡・井波・城端・五箇山・白川郷をつなぐ「3つ星街道」のルートマップ
出典：南砺金沢・世界遺産バスフリーバスHP

最後に、「3つ星街道」を起爆剤に携い奔走する山口誠さん（城端景観・文化保全機構理事）に今後の展望を伺った。「城端と井波は昔から独自の文化を守りつつ、多様な人やものを受け入れてきました。そんな土壌があるからこそ、新しいまちづくりが活発化しているのだと思います。しかし一方では、隣町でありながら、交通機関の脆弱性から頻りに交流できなかった経緯もあります。これからは、それぞれの文化を生かしたまちづくりに取り組みむとともに、南砺市や南砺市観光協会とも連携しながら、高山白川郷、金沢からの観光客誘致も進めていくことが必要です」と山口さん。

で3つ星として紹介された観光地をつなぐ「北陸飛騨3つ星街道協議会」が発足。以来、公共交通の相互協力を行っており、中でも金沢・五箇山・白川郷・高山を結ぶ「3つ星街道」は高い人気を集めている。城端、井波もこうした広域連携に参画し、観光客の足をしっかりと確保していくことで、「滞在力」や移住、起業も含む次世代への活力を高めることができるのではないだろうか。

北陸での町並み塾のこと

観光まちづくり学部長 西村幸夫

北陸を舞台に2004年から年4回、ゲストを招いて町並みやまちづくりを語り合う「西村幸夫町並み塾」というものを続けてきた。今年で22年目、回数になると、途中で特別企画なども含むので、これまでに80回ほどになる。

今回特集の城端でも、善徳寺のスペースをお借りして幾度か町並み塾をやらせていただいた。毎回、ゲストの講演、ゲストとの対談の後はまちなか散策、そして恒例の交流会と続くのだが、町並み塾in城端では善徳寺の庫裏での飲食なので、いやがおうにも盛り上がる。なにしろ、背が1m近くもある差鴨居が縦横に飛び交っているという豪快な空間である（写真）。盛り上がらないわけがない。

なぜ町並み塾は北陸が舞台なのかというと、それは単純に私自身が北陸の応援団だからである。毎回、町並み塾のたびに異なった場所を舞台に、魅力的なまちあるきができるような地域はそれほど多くない。それだけ歴史文化の幅と奥行きがある。

20世紀は、太平洋沿岸の大都市と工業地帯が牽引した世紀だった。日本海側は「裏日本」などと呼ばれてきた。しかし、考えてみると19世紀までは日本海沿岸は北前船や西廻り航路の舞台となり、日本のメインの交易ルートとして栄えてきたのである。港町を見るとそれがよく分かる。開発の時代がひと段落して、21世紀はふたたび文化の時代となるだろう。その時、北陸をはじめとする日本海側は、歴史の表舞台にふたたび戻ってくるに違いない。

(右) 城端・善徳寺の大田炉裏に集い、夜更けまでまちづくり談義
(左) 善徳寺大広間で開かれた第77回「西村幸夫町並み塾」の大懇親会



いなみ国際木彫刻キャンプは4年に1回のイベント。作品作りを通して交流する

まちに馴染む ミニマムデザイン

山川さんは、ジンウラボでサポートする起業家の店舗建築も多数手掛けている。1号店のパン店「ベイカーズハウスクボタ」に始まり、コーヒーショップ「ヘイズコーヒーロースタリー」、ブルワリー「NAT.BREW」など。いずれも古い建築の持ち味を生かし、できるだけ壊さず、最小限のデザインを仕込むことでモダンな空間に仕上げ、井波の町並みと調和させている。

「パン店の窪田さんとは、店のイメージやデザインなど何度も打ち合わせして設計しました。開店までの準備期間は、

「Bed and Craft」のレストランを手伝っていたとき、井波になじんでもらったのも良かったと思っています」と山川さん。

建築とデザインの力によるまちづくり。山川さんの手腕はますます研ぎ澄まされてきている。

彫刻師とふれあう 彫刻塾を企画

彫刻師の前川大地さんは、井波彫刻をベースにした観光開発に取り組んでいる。前川さんは愛知県立芸術大学を卒業後、現代アートや美術展の仕事を経て、2006年に帰郷。その後、彫刻師の父に弟子入りし、修業を経て独立した。現在は、井波彫刻協同組合の理事として井波彫刻の発展に尽力しながら、ジンウラボの一員として、芸術文化の視点を活かした企画やアイデアを考案している。

その一つが昨年、観光庁「第2のふるさとづくりプロジェクト事業」の一環で開催した「彫刻塾」だ。

参加者を募り、工房見学や作品づくりなど全5回のプログラムを受講してもらった。東京や大阪から10数人が参加し、井波彫刻の奥深さを堪能したという。「井波に滞在してもらい、まちの歴史や伝統を実感してもらったことができた」と前川さんは振り返る。



① 井波木彫工芸館を引き継ぐ彫刻師の前川さん
② 彫刻塾では工房の見学や、彫刻師の指導を得ながら作品づくりも行う。高齢者や子どもたちも参加
③ 彫刻塾には海外からの参加者もいる

今年度は昨年得た知見を活かし、五箇山の和紙、福光の麻布などの伝統工芸と連携し、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド（福野）、こきりこ祭り（五箇山）などのイベントも絡めた体験観光を企画し、実施した。「仕掛けづくり、仕組みづくりは大事。いろんな体験を通して井波に親しみ、いい印象を持ってもらい、移住先の候補地に選んでもらえたらいいですよ」と前川さんは話している。

多様性を受け入れる 懐の大きさ

井波には独自の文化を守りつつ、多様性を受け入れる懐の大きさがある。外のものを受け入れ、変化を楽しむ気質もある。かつて五箇山から下りてきた人を温かく迎え入れ、地場産業の発展につなげてきた歴史もある。そんな土壌があるからこそ、新しい動きが派生し、シナジー効果が生まれているのだ。

「まずは住民がこのまちの暮らしを楽しみ、外の人は友達を訪ねるような感覚でまちに遊びに来る。そんなコミュニティの広がりを持続的なまちづくりになるのだと思います。今後も行政と連携しながら、まちを元気にしていきたいですね」とジンウラボ代表理事の島田さん。

ジンウラボから発生し、躍動し始めた井波のダイナミズムは、過疎化が進む全国の小さなまちにとって一つの理想であり、お手本のようにも見える。



④ 「土着醸造」をコンセプトに起業したブルワリー「NAT.BREW」
⑤ 店内では各種のクラフトビールが味わえる

全国の地方創生のモデルとなった 離島ならではの活性化

青山敦士氏 株式会社海士代表取締役(島根県海士町)



また、ジオパークの世界ネットワークに加盟し、「地域の価値を見つめ直す」取り組みが隠岐諸島全域へ広がった。そのなかで観光の柱とされたのが「宿泊業」である。2017年、海士町は観光基本計画を策定し、島で唯一のホテル

また、海士町では人材確保と育成にも力を入れている。料理学校「島の寺子屋」の卒業生や、島前高校出身の社会人、

最後に青山氏は、「観光とは、地域の呼吸のようにあり続けたい」と結び、観光を地域の営みとして根付かせていく、観光まちづくりの本質を静かに伝えた。

第二部

前町長主導でスタートした まちづくりと観光政策

島根県・隠岐諸島の海士町から登壇した青山敦士氏は、自身の20年に及ぶ観光まちづくりの経験と、宿泊業を起点とした地域活性化の事例について紹介した。

海士町が過去20〜30年間で地方創生の事例として注目を集めてきた取り組みは、故・山内道雄前町長の行財政改革から始まっている。外貨獲得のための特産品開発やブランド戦略、さらには観光振興へと歩みを進め、現在進行中である。

さらに島の高校が廃校の危機に直面した際には、高校魅力化プロジェクトにより、全国・海外から学生を集めて新たな教育の場へと再生させた。

また、ジオパークの世界ネットワークに加盟し、「地域の価値を見つめ直す」

シンポジウム「多様なセッションが響き合う、観光まちづくり」

第二部のシンポジウムには3名のプレゼンターが登場し、それぞれが実践している「観光まちづくり」について講演し、パネルディスカッションへと続いた。

を高付加価値施設へとリブランドする方針を決定。老朽化していた「マリナーホテル海士」(旧国民宿舎)を改修し、2021年、「泊まれるジオパーク拠点施設」として「Entô(エントウ)」が誕生した。

Entôは単なる宿泊施設ではなく、隠岐の自然や文化、そして地球の営みを感じさせる体験の場として設計された。海と断崖を望む客室や、時間の流れを感じさせる地質の展示スペース、地元料理学校と連携した食の提供、図書館との協働によるライブラリーの設置など、館内には多角的な仕掛けが施されている。

建築にも環境配慮型のCLTパネル工法を採用し、教育現場と連携した学びの場としても活用されてきた。さらに建物の一部はシェアオフィスとなり、観光協会や役場、DMO、教育財団などが同居。日常的に行政と民間が意見を交わす場となっており、「観光施設」地域の「ハブ」として機能している。

こうした取り組みは、観光庁長官表彰や建築賞、日本ジオパークネットワークからの受賞など多方面で評価されており、持続可能な観光のモデルとして注目されている。

また、海士町では人材確保と育成にも力を入れている。料理学校「島の寺子屋」の卒業生や、島前高校出身の社会人、

第一部

全国の町並み保存活動に大きな影響を与える 観光まちづくり学部

2024年11月6日、第5回「観光まちづくりフォーラム」が開催された。観光まちづくり学部が開設されてから3年目に入り、最上級生は3年生となった。第5回「観光まちづくりフォーラム」では、観光まちづくりとは何か、持続可能な地域の実現に観光がどう関わるのかについて、活発な議論が展開された。第一部は主催者と来賓のあいさつに続き、西村幸夫学部長が学部の現状と未来について説明した。

活躍が期待される 観光まちづくり学部卒業生

第一部は、針本学長があいさつに立ち、来賓への御礼を述べた後、観光まちづくり学部の取り組みや、全国各地域との包括連携協定に基づく活動などを紹介した。

連携地域の千葉県香取市佐原地区、三重県鳥羽市、岐阜県高山市、愛媛県内子町、大分県由布市との研究交流、学生のフィールドワーク、インターンシップなどの具体的な活動を挙げて、各地の支援について感謝の言葉を述べた。続いて来賓の全国町並み保存連盟事務局長山本玲子氏が祝辞とともに連盟の活動について紹介した。

同連盟は重要伝統的建造物群保存地区制度が始まる前年の1974年に創設され、有松・今井・妻籠宿の町並み保存運動を契機として発足した。活動は47回に及ぶ「全国町並みゼミ」へと発展し、現在は北海道から沖縄、台湾にまでネットワークが広がっている。

山本氏は、設立当初の町並み保存が高度経済成長期の開発圧力への市民か

らの自発的な声だったことを強調し、地域住民、研究者、行政担当者が一堂に会する「全国町並みゼミ」の精神と意義を語った。

現在では空き家や高齢化といった新たな課題に対応するため、住民団体に加え、専門的知見や財源を持つ団体も活動を担っており、地域の風景とその背景にある自然環境までを含めた包括的な視点が求められていると指摘した。そうした中で、國學院大學観光まちづくり学部が取り組む人材育成には大きな期待を寄せており、今後、卒業生が各地で活躍し、町並み保存の最前線に立つ人材となることを願い、あいさつを締めくくった。

学部の独自性と総合的な アプローチが重要

次に西村学部長から学部の教育・研究の現況について説明がなされた。

本学部では、「地域の個性をみつけ、みがく」「地域の多様なつながりをつくり、活かす」「地域の暮らしを支え、豊かにする」「地域の未来をつくる人材と仕組みを育てる」の地域社会の持

持続可能性を支える四本柱を教育の中心に据え、これらがサステナビリティの三本柱(環境、社会、経済)に対応している」と述べた。

また、学部の教育方針として三つの特徴を示した。第一に「地域から観光を考える」を挙げ、事業者のためではなく地域のための観光を考える重要性を説いた。第二に「理論と実践の両方」に加えて現場での体験を通じた学習の重要性を強調した。第三に「理系・文系の垣根を越えて学ぶ」を挙げ、カリキュラムの特徴として、社会、資源、政策・計画、交流・産業の4分野を設定し、基礎から応用まで体系的に学べる構成を紹介した。

学生同士の共同作業や教員によるグループディスカッションなど、独自の教育手法にも触れ、多様な専門性を持つ教員が協力していることを強調し、観光まちづくり学部の独自性と総合的なアプローチの重要性を改めて訴えた。今後も地域の現場と連動した教育を通じて、観光と地域社会の新たなかたちを模索していく姿勢が示された。



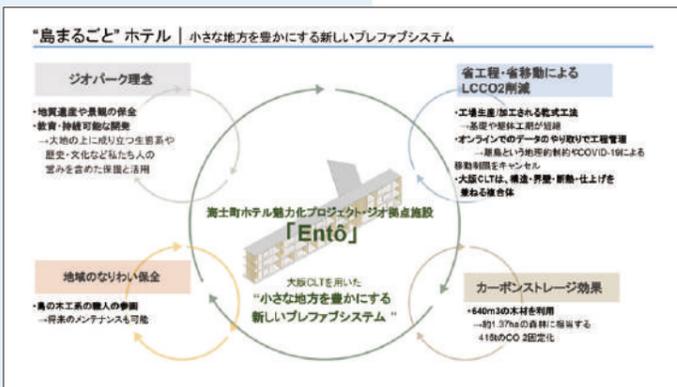
西村幸夫
観光まちづくり学部長



針本正行
國學院大學学長



山本玲子氏
特定非営利活動法人
全国町並み保存連盟事務局長



ジオパークの雄大な風景が楽しめる

食材のほとんどが島のもの



市民参加で始まった 歴史を生かしたまちづくり

荻原礼子氏 まちづくりプランナー・NPO法人こもろの杜理事長(長野県小諸市)

「町の自慢は何か」と問い 市民の誇りを引き出す

まちづくりプランナーとして活動する荻原氏は、都市のインフラ整備といった「ハード」よりも、市民の思いや参加を重視する「ソフト」なまちづくりを専門としている。現在は神奈川県小諸市に住みながら、ふるさとである長野県小諸市と行き来し、20年以上にわたる地域の再生に取り組んできた。小諸は浅間山を背景に、千曲川に向かって広がる谷地形の町で、日本で唯一「城の上」の町である。武田信玄が築いた小諸城の周辺には、今も中世から続く町割りや蔵、石畳などが残されている。しかし、観光地として知られる懐古園以外の町並みは活用されないまま老朽化が進み、空き家や空き地の増加が課題となっていた。

2000年に市が「歴史まちづくり事業」に乗り出したものの、当初は市民の関心が薄く、協力を得ることは容易ではなかった。そこで荻原氏は仲間とともにNPO法人「小諸町並み研究会」を設立し、市民とともにまち歩きを行い、古民家や歴史的な建物の価値を再発見する活動を始めた。何が欲しいかを尋ねるのではなく、「町の自慢は何か」を問うことで、市民が心の中に持っていた誇りを引き出し、まちづくりの出発点とした。その中で取り組まれたのが、空き家となっていた旧商家の活用である。千葉大学の協力を得て、建物の実測と並行して

ワークショップを開催し、町の文化や記憶をどう伝えるかを議論した。その中で、味噌や醤油の醸造蔵を残し、地元のお神輿を展示するなど、市民が主体となった施設を維持管理する拠点が生まれた。こうした活動を通して、地域の中に「使いつながら残す」文化が根づいていった。

公園という空間を 「地域の顔」に

一方、駅前空き地を活用した「停車場ガーデン」の整備では、荻原氏が各地で実践してきた市民参加型の公園づくりの手法が導入された。

5回のワークショップには延べ159人が参加し、「公園でワインが飲める場所が欲しい」「古い建物をカフェに再生したい」といった具体的なアイデアが出された。市民の提案を基に複数のプランをとりまとめ、公園の整備が段階的に進められた。

この過程では、設計者やガーデンナー、家具作家など多様な専門家と市民が丁寧な意見を交わし、納得いくまで議論を重ねた。植物の剪定や家具のデザインも住民の手で行われ、入札制度では実現できない「手づくりの質」を実現。設計段階から市民が深く関与したことで、完成後も愛着を持ち、自主的に関わる体制が生まれた。

運営面では、NPO法人が指定管理者となり、カフェやショップを併設。売り上げの一部を公園の維持費に回す持続可能な仕組みを整備した。さらに、市民ボランティアによる園芸教室「花と緑の学校」や、地元の食材を活用した「食のた

んげん隊」など、多彩な活動が次々と展開された。こうした草の根の取り組みは、公園という空間を単なる施設から「地域の顔」へと変えていった。

また、町並み保存の文脈でも、空き家を活用した「城下町フェスタ」を12年にわたり開催。作家や飲食店が出店し、地域の高齢者と若者がつながる場を創出してきた。空き家所有者にとっても「建物を残して生かす」という意識変化が生まれ、まち全体の更新が少しずつ進みつつある。

近年では、地元高校の「観光ビジネス」授業にも関わり、生徒と共にまち歩きや事業者訪問を行い、空き家活用プランの作成を支援している。また、大学の研究室合宿を小諸で受け入れ、学生による地域提案の発表が地元住民の刺激となっている。

荻原氏は講演の最後に、「まちづくりの原動力は、『好き』という気持ちと、関わる仕組みをつくること。センスある若者が小諸に関わることで、地域の未来が開ける」と語り、ふるさとと共に歩む新しい時代のまちづくり像を提示した。



昔の味噌蔵を維持管理



NPO 小諸町並み研究会の活動



市民参加型でまちづくりを考える

郷土料理と特産物がキーワード 地元の当たり前が宝となる

高森えりか氏
有限会社高森量工店取締役(青森県八戸市)



地元の当たり前が育む 郷土への誇りと愛

青森県八戸市出身の高森氏は、自身が観光まちづくりに関わるようになった経緯を紹介しながら、Uターンをして実家の畳店を継ぎ、本業と並行して行っている地域活動について語った。講演では、八戸の観光資源の中から「八戸せんべい



本業と共にさまざまなまちづくり活動を行っている

汁」と「イカ」の二つに焦点を絞って話を展開した。

高森氏はまず、2024年6月に国土交通省が実施した観光資源の認知度調査で「八戸せんべい汁」がトップとなったことを紹介。かつては家庭料理としてごく普通に食べられていたもので、誰もがその価値に気づいていなかった。ところが今では八戸を代表する観光資源となったと述べた。

その転機となったのが、2003年に誕生した市民ボランティア団体「八戸せんべい汁研究所(通称・汁研)」の活動である。高森氏によれば、汁研は特定の業者や飲食関係者に限らず、地域に暮らす市民が「八戸を元気にしたい」との思いから立ち上げた団体であり、観光まちづくりの担い手として注目されてきた。

汁研の基本方針は、「八戸せんべい汁」を通じてまず八戸を知ってもらい、実際に現地を訪れて味わってもらい、そしてせんべい汁以外の地域の魅力も体験してもらうことにある。目的は料理を売ることにそのものではなく、八戸の食文化を活用したPRにあると高森氏は説明した。その中でも特に重要な取り組みとして挙げたのが、2006年2月に八戸市の八食センターで開催された「第1回B・1グランプリ」である。汁研が主催し、北海道から九州までの地元グルメが集結するイベントとなった。

高森氏は「B・1グランプリ」には、地域に行ってみたいと思わせるきっかけ、地域住民を巻き込む仕組み、そして郷土愛を育む機会という三つのチャンスがある」と語った。とくに第8回大会(愛知県豊川市)では、来場者が58万1000人に達し、経済効果は35億円とされ、非

常に大きな成果を上げた。

また「八戸せんべい汁」も2010年度には年間563億円の経済波及効果をもたらし、料理そのものの需要拡大に加え、地域全体の魅力を高める契機となったと話す。高森氏が最も重視する成果は、「市民の意識の変化」である。当初は冷ややかだった地元の反応も、「せんべい汁で町おこしができるのなら、他にも誇れる資源があるはずだ」と気づき、郷土への誇りと愛着が生まれていったという。

地元の人が無理なく 参加する観光まちづくり

二つ目のキーワード「イカ」については、八戸朝市の非公式キャラクター「イカドン」と、それを支える市民グループ「イカドンファミリー」の活動が紹介された。

イカドンは、朝市の会場を気ままに散歩し、地元の人々や観光客と交流しながら会場を盛り上げる存在である。

高森氏は、こうした活動を「イカ活」



朝市を歩くイカドン

「せんべい汁」3~4割 関東、関西圏 最も高く

| 地域 | 認知度 |
|-------------------|-----|
| 八戸圏外の観光資源認知度調査 | |
| 種差、えんぶり、朝市...1割以下 | |
| 八戸圏内 | 85% |
| 青森県内 | 75% |
| 東北圏 | 65% |
| 関東圏 | 55% |
| 関西圏 | 45% |
| その他 | 35% |

2024年6月13日デイリー東北掲載記事

シンポジウムパネルディスカッション 「多様なセッションが響き合う、観光まちづくり」

フォーラム第二部の後半は、3名の登壇者によるパネルディスカッションが実施された。西村学部長がモデレーターを務め、観光まちづくり学部3年生の学生2人がアシスタントとして加わり、「多様なセッションが響き合う、観光まちづくり」をテーマに活発な議論が展開された。



外との活発な交流が 島の中の交流を生み出す

西村 素晴らしい発表を受けて、まず学生の感想を聞いてみたいと思います。
小森谷咲希(以下小森谷) 授業で訪問した小諸はすてきなまちで、萩原さんのお話はその魅力が伝わる内容で感動しました。建物の保存や継承の難しさについて、さらにお話を伺ってみたいと思います。
西村 それでは、古川さん、どうでしたか。
古川素人(以下古川) 私は東京の離島、神津島の出身で、青山さんの発表に共感しました。島には独特の課題があり、「島を超えた民間同士の協働が必要だ」というお話しに強く引かれました。ぜひその点について深くお聞きしたいです。
西村 まずは青山さんに質問します。なぜ海士町のまちづくりがここまで進んだのでしょうか。最初のアイデアや取り組みが他に

地域のプレイヤーたちが活躍する まちづくりの今をフォーカス

来が一時完全に止まりました。外部の人が来ないだけでなく、島の中の人同士の交流すらもほとんどなくなりました。そこで気づいたんです。外との交流が、実は内部の交流も生み出していた。その循環が止まったことで、交流の意味をあらためて深く考えるようになりました。それが「呼吸」という言葉につながっているのだと思います。外との出入りがあることで、島の中にも風が通っていたのでしょか。

行政とも協力して進める 市民参加型のプロジェクト

西村 それでは小諸の萩原さんに伺います。ワークショップで住民の思いを引き出し、設計の現場につなげていく点で、建築家や造園家との連携には苦労もあると思うのですが、どう乗り越えてこられたのでしょうか。

萩原 最初は、役所の設計者とぶつかりましたし、強い抵抗もありました。そこで私たちは「こう設計してほしい」と言うのではなく、「こういう風景をつくりたい」「こういうことをやりたい」と言葉で伝えるよう努めました。それを受け止めてくれる設計者の存在も重要で、市にも「市民参加型の設計ができる人」とお願いしました。

西村 対案と行政側の案がぶつかる、難しさもありますよね。
萩原 意見がぶつかった場面はありますが、最終的に市民がすこくやる気になっていましたので、役所も設計者とうまく調整してくれました。

西村 言葉がデザイナーの力になることもありますよね。
萩原 行政は役所の案を市民に通すとい

違ったのでしょうか。
青山 良いところばかりを話しましたが、課題もたくさんあります。私が初めて訪れた2005年は、先ほど紹介した山内前町長がまさに改革を始めて2年ほど経った頃でした。その前までは、目に見える動きはなかったと聞いています。

当時、町では「官でも民でもやる人がやる」といった覚悟が共有されており、役場の方々も立場を超えて取り組んでいたのが印象的でした。
西村 それはやはり町長が、「やるんだ」といった号令をかけたのが、大きかったのでしょうか。

青山 そうですね。選挙では難しいと言われていた中、町民の側からも変革を望む声が高まりました。町長だけでなく、それを支える役場や民間の人たちのタイミングが一致していたことが、海士町の強みだったと感じています。
西村 なるほど。ところで、複数の島で連携しようとする、文化の違いや温度差もあるのではないのでしょうか。

青山 四つの島にはそれぞれ独自の文化があり、簡単には一緒にはなれませんでした。最初の頃は「まず自分の足元をしっかり固めろ」と言われ続け、地域内の基盤づくりが注力してきました。その結果、観光という分野では「組んだほうがよい」という共通認識が少しずつ育ってきたと思います。

西村 観光はゼロサムではないですから、お互いにとってプラスになれる分野ですよ。

青山 はい。観光は相互に利益を生む領域で、だからこそ民間同士で島を超えて連携しようという動きが、15年かけてよ

う立場だったのが、一緒に進めるうちに、市民側の案のレベルの高さに気づいてくれて、意識が変わってくれました。「市民の力を引き出すのが自分の仕事だった」と思い出してくださったようで、嬉しかったですね。
西村 なるほど。その都度ぶつかりながら、信頼関係を築かれてきたのですか。
萩原 そうですね。最初は対立から始まりますが、最後は「また一緒にやりましょう」と言ってくくださるような方も増えてきました。

西村 小森谷さんの話が出ましたが、小諸の印象はどうでしたか？
小森谷 個人的に訪れた「秋灯り小諸」では、若い人や家族連れが集まっていて、とても温かい雰囲気でした。地域に根づいているイベントだと感じました。

二足のわらじで地域創生 両立の秘訣は楽しむこと

西村 それでは次に高森さん、お願いします。まちづくりと家業の両立は難しい面もあると思いますが、どのようにバランスを取っていらっしゃいますか。
高森 私は、まちづくり活動を「趣味」として位置づけていて、家業とは分けて考えるようにしています。

また、社長である父から、まちにどんな出ていく畳屋になれと言われてきたこともあり、仲間と活動できる環境に恵

うやく芽生えてきたのだと感じます。
西村 古川さん、離島出身者としてももう少し突っ込んで聞いてみたら。
古川 とても共感しました。どの島にも志を持っている人はいると思いますが、そうした人たちが孤立してしまうこともあります。青山さんは、そうした状況の中でどうやって合意形成をされてきたのでしょうか。

この広域連携プログラムを通じて、地域の経営者やコーディネーターとつながることができました。彼らからの知恵や励ましが、私たちの支えになっていきます。
古川 先ほどお話しされた「島において観光は呼吸である」という表現がすごく印象的でした。自分も離島出身として、外部との交流の大切さは実感しています。ただ、その「呼吸」というイメージが、具体的にどんな場面を指しているのか、もう少しお聞きしたいです。
青山 歴史をたどると、隠岐は北前船の寄港地でもあり、昔から、「外の人」と出会い、受け入れる土壌がありました。ところがコロナ禍の3年間で、その行き

来が一時完全に止まりました。外部の人が来ないだけでなく、島の中の人同士の交流すらもほとんどなくなりました。そこで気づいたんです。外との交流が、実は内部の交流も生み出していた。その循環が止まったことで、交流の意味をあらためて深く考えるようになりました。それが「呼吸」という言葉につながっているのだと思います。外との出入りがあることで、島の中にも風が通っていたのでしょか。



1 Entoに配備された役場のオフィス 2鳥まるごと図書館のライブラリーの一つ 3オフィスに設置されたテレプレゼンシステム「窓」

行政と民間の垣根を越えて 互いのリソースを活用していく…青山氏

まれていました。
西村 両立ができるわけですね。
高森 はい。しかも、まちづくりの活動は、実は本業につながることもあり、活動で出会った方から畳替えの依頼があるなど、ある意味、まちづくり活動が営業になっていきます。それを狙っているわけではなく、偶然ですが。
西村 偶然ね。
高森 平日は仕事、土日は温泉旅行と同じ感覚で、八戸せんべい汁研究所のイベントやイカドンの活動をするのが、八戸での生活の楽しみ方の一つです。
楽しく活動していると、仲間が増える

という好循環もあり、畳屋と両立しています。
西村 東京の世田谷での経験をお持ちですね。
高森 大学院時代から「世田谷トラストまちづくり」に関わり、現場での経験を通じて「地方にどう持ち帰るか」を常に考えていました。青森の弘前でも助成制度に関わったことがあり、地域ごとのまちづくりの特徴を意識するようになりました。
小森谷 まちづくりを「趣味」とされている点が心に残りました。仲間をどう集めていこうか教えてください。
高森 イベント時に声をかけをしたり、学校の先生を通じて学生にアプローチしたりしています。「汁研サポーターズクラブ」では緩やかなネットワークを作っており、楽しく活動すること自体が仲間づくりにつながっています。
古川 高森さんから小さな団体の活動が、まちを動かす大きな力になると聞いて、すごく励まされました。
八戸の地域資源の価値に気づいたきっかけは何でしたか？
高森 私は高校生の頃から郷土愛が強く、まちの衰退に気づいた時に参加したワークショップで人生が動きました。仲間と語り合う中で、「八戸ってやっぱりいいよね」と再確認する瞬間が多く、そこに気づきのきっかけがあります。
西村 郷土愛がすごいですね。
高森 尋常じゃないです(笑)。
外から来る人をまちづくりの仲間にする
西村 海士町は、人に来てもらおう仕組みが出来上がっていますね。その受け入れ

の体制を整えるには人材が大事かと思えます。
青山 観光という領域に、10年から20年関わり、やはり観光分野における人材育成や採用は、業界としても非常に大きな課題だと感じています。今日のお話を聞いて、「観光業界で働く」というよりは、「観光×○○」といった観光を手段に地域に関わるスタイルのほうが、やりがいや楽しさにつながるのかもしれない。
荻原 小諸でも古い世代がまちの価値を守ってきましたが、次の世代がその思いを共有できていません。だからこそ、価値を再認識し、新しいコミュニティを育てながら、未来像を地域全体で共有する仕組みが必要だと感じています。
でも逆に、古い町並みや町家などに新たな価値を感じる人もいて、今までのように、古いコミュニティがまちを守っていくのではない、別の受け継ぎ方があると思います。
そのとき、将来像を地域全体でどう共有するかが重要だと思います。新しいコミュニティが、古いまちや町並みを愛してくれる人と一緒に、どう将来像をつくっていくのか、今までは違う何かしらの市民参加の工夫が必要だろうと思います。
西村 中と外をうまくつないで、外に情報発信したり、外の人が来てくれる仕組みを考えたりできる荻原さんのような人が必要ですよ。
荻原 はい。そう思います。住んでいる方は80歳、90歳と高齢で、10年後の話し合いをしようという感じではなく、役所の方も移住者マッチングなどに取り組んでいます。古いコミュニティに積極的には関わっていません。

そこで私は一軒一軒、「今まで大切にしてきたものを次の世代にどうつなぐかを考えよう」と言って回っています。外から来る人にはとにかく、一緒にまちづくりをやる仲間として入ってくださーいとお話しています。まちづくりの仲間として、風景や町並みを一緒につくって、それを資源化していきたい。一緒に資源として感じて、一緒に大事にしたい仲間。新しいコミュニティをつくっていく時代だと感じています。
課題の一つは資金面
さまざま工夫で乗り越える
高森 私からお二人に質問をしてもよいでしょうか？
私は趣味でまちづくりを楽しんでいますが、資金面では常に課題を感じています。「八戸せんべい汁研究所」は、会費や協賛金や市からの助成金などで活動を回しています。「イカドンファミリー」も、市の若者支援制度を活用していますが、持続的に運営していくにはお金の問題が大きな壁です。
お二人はどのように資金を回してこられたのか、ぜひ伺いたいです。
青山 私も非常に悩んでいます。私たちは宿泊業を中心にマネタイズをしています。新たなマーケットに対応するため、今までにない価値観やサービスへの対応が求められ、地域との摩擦もありました。しかし、外から来た人が地域に新しい価値をもたらすという認識が徐々に広まり、共通理解が生まれてきました。行政の支援もありましたが、それがなければ成り立たなかった面もあります。
荻原 私も、小諸での活動は「趣味」のような感覚で続けています。ただ、組織



1・2 2009年4月にオープンした 駐車場ガーデン

市民も行政も巻き込んだ 観光業だけではないまちづくり…荻原氏

として運営する際、報酬の有無が摩擦を生むこともあります。お金のあるなしで「使われている」と感じたり、「誰かが得ている」と思われたりしないよう、納得感のあるマネジメントが必要です。お金だけでなく、生きがいや仲間との関係など、価値の多元化が大切です。

観光まちづくりを学ぶ 学生たちの目線

西村 それでは学生から一言ずつもらいましょう。小森谷さん、どうぞ。
小森谷 お三方から、宿泊業や町並み・建物保全に関するお話、地域のPRに関するようなお話をたくさん聞いて、視野が広がりました。現場に行くことの大切さも再確認しています。人との出会いや地域とのつながりが観光まちづくりの本質であると、改めて実感しました。ありがとうございました。
また、「まちづくりが趣味」という言葉もとても印象的でした。これから就職活動が始まりますが、まちづくりへの

西村 パネリストの方からまとめのコメントをお願いします。
高森 皆さんに伝えたいことは、ぜひ八戸に遊びに来てください、もうこれに尽きます。やはり現場に来ていただいで、八戸の魅力を感じてほしいです。現場に足を運んでこそ、今日の話が実感としてつながると思います。



関わり方という点でこれまでなかった視点をいただきました。
古川 私は観光まちづくり学部の学生として、そして、衰退している離島の若者の代表として、島を盛り上げる使命感があります。これから引つ張っていかなくてはという気持ちがある中で、どうしても地元愛が重荷になることもありますが、今日の話を聞いて、愛を前向きに生かす方法があることを学びました。観光まちづくりとの関わり方を、残りの学生生活で模索していきたいです。
西村 ありがとうございます。
高森 皆さんに伝えたいことは、ぜひ八戸に遊びに来てください、もうこれに尽きます。やはり現場に来ていただいで、八戸の魅力を感じてほしいです。現場に足を運んでこそ、今日の話が実感としてつながると思います。
西村 ありがとうございます。
青山 今日本場に貴重な機会をありがとうございます。観光まちづくりには、町並みや食など、さまざまな側面がある、改めて学ばせてもらいました。行政と民間の垣根を越えること、大学や金融機関など、それぞれが持つリソースをどう引き出すかという視点も重要です。分野の枠にとらわれず、複数の主体が関わり合う「共通のオーナーシップ」を持つ関係性をデザインしていくことが、今後の鍵だと思います。
いろんな形で引き続き関わっていききたいと思いました。

地元の人も再発見 八戸の魅力を知ってほしい…高森氏



1 2016年のB-1グランプリでの集合写真 2 2012年北九州で行われたB-1グランプリで獲得した

西村 素晴らしいまとめをありがとうございました。
われわれが目指しているのは、大学の中だけではなく、さまざまなプレイヤーと関わりながら、それぞれが刺激を合い、なおかつそれぞれの一番の強みをお互い生かして合っていくことです。地域が元気になることに総合的に関わり、携われる人材を送り出せるのであれば、幸せだと思います。学生諸君もしっかり発言ができ、本当にうれしです。今日はありがとうございました。
(文責 楓 千里)

「雪でメシを食う」

開催日: 2024(令和6)年10月9日(水)

講師: 河野 博明 氏 株式会社野沢温泉元社長、長野オリンピックアルペン男子セクレタリー



第11回観光まちづくりカフェでは、株式会社野沢温泉(長野県)初代社長の河野博明氏を迎え、講演とトークセッションが行われた。河野氏は、かつて札幌オリンピックを目指した元選手であり、引退後は指導者、競技運営者を経て、1998年長野オリンピックでアルペン男子セクレタリーを務め、2005年からは民営化された野沢温泉スキー場の経営再建に挑んだ人物である。

第1部の講演では、日本スキー史と野沢温泉の歩みを振り返った。野沢温泉はもと湯治場で、冬は雪深く非常に貧しい温泉地であったが、村では白い厄介者(=雪)を恵みをもたらすものに変えられないかと考えていたところ、野沢温

泉にスキーが入ってきた。1月12日は「スキーの日」。1911年のこの日、当時のオーストリア・ハンガリー帝国のレルヒ少佐が、新潟県下で、日本陸軍第13師団の将校たちに対して、日本で初めてスキーの指導をしたとされている。それからわずか1年後には野沢温泉にスキーが伝わり、1923年にはスキークラブが結成される。現在はオリンピック選手が16人所属し、90年代に団体で金メダル2回、個人で銀メダル1回獲得の河野孝典氏もその一人である。以降、野沢温泉は、国体や世界大会の開催を通じて発展し、民宿文化の誕生もスキーに由来した。最盛期である1991年、92年スキーシーズンには年間110万人の来訪者を記録し、スキー場収入は49億円に達し、野沢温泉の上下水道のインフラ整備なども進んだ。

しかし、バブル経済崩壊後は訪問客が激減し、経営は赤字に転落した。河野氏が初代社長に就任した2005年、村には危機感が広がっていた。そこで徹底した経営改革を断行。不要なリフト撤去、駐車場やトイレの整備、接客改善などにより、7年で19億円の負債を完済、さらに33億円を村に還元した。2020年には30億円をかけてゴンドラを、21年にはスキー場の玄関となる長坂グレンデにある旧ゴンドラステーションを長坂センターハウスとして10億円をかけて建て替えた。こうした努力が功を奏し、スキー場は黒字経営に転じ、天然雪100%の魅力と海外からの高評価によって再生を果たした。現在は、来訪者の80%が宿泊、20%が日帰りとなり、受け入れ量不足の課題も生じている。

第2部では、本学部の米田誠司教授がファシリテーターを務め、1992年アルペルビルオリンピック、1994年リレハンメルオリンピック2大会連続金メダリストの河野孝典氏、公益財団法人東京オ

リンピック・パラリンピック競技大会組織委員会元輸送局長、全日本スキー連盟副会長の神田昌幸氏も交えてトークセッションを行い、スキーを核とした野沢温泉の歴史と未来が語られた。

地球温暖化は大きな課題であり、雪不足がスキー場の持続性を揺るがしている。また、近年は国際資本による宿泊施設や土地の買収も進んでおり、地域アイデンティティの喪失が懸念されている。野沢温泉でも既に100件を超える物件が外国資本に渡り、地域としての主体性をいかに守るかが問われている。また、野沢温泉は教育面で独自の取り組みを進めている。保育園から中学校までスキー教育をカリキュラムに組み込み、次世代育成に力を注いでいる点は、全国的にも先進的な事例だと紹介された。

かつて人口5千人規模の村から16人ものオリンピック選手を輩出した背景には、子どもたちを海外へ留学させ、現役選手が次世代を育てるという独自の人材育成の仕組みがあった。修学旅行の「訓

練型」体験を見直すなどの指摘もされた。本講演とトークセッションは、野沢温泉の再生の歩みから学ぶべき知恵を示し、観光まちづくりに携わる全ての人に深い示唆を与えるものとなった。

「突端から風をおこす
—まちおこしゲリラの挑戦」

開催日: 2025(令和7)年5月28日(水)

講師: 島 康子 氏 Yプロジェクト代表取締役



第13回観光まちづくりカフェ第1部では、青森県大間町出身の島康子氏に、本州最北端の地で展開してきた独自の地域づくりについてご講演いただいた。2000年代初頭から「オーマの休日」ポスターや「勝負パンツ」「マグロTシャツ」などユニークな発想で町を盛り上げ、全国から注目を集めてきた人物である。島氏は幼少期は「本州最北端」という枠に縛られ都会に憧れたが、1998年にUターンしたことを機に価値観が一変。都会と田舎を上下で比べるのではなく、地域固有の「濃さ」に魅力を見いだしたことが活動の出発点となった。

2000年、NHK連続テレビ小説『私の青空』を契機に注目を集めた大間では、函館から到着するフェリーを大漁旗で迎える「旗ふりウェルカム活動」を開始。子ども時代の原風景を蘇らせた取り組みは観光客に喜ばれ、町の象徴的な活動へと広がった。しかし、航路は赤字により2008年に廃止の危機に直面。島氏は「なくすな航路」運動を展開し、2万人の署名を国土交通省に提出した。結果として新造船「大函丸」が2013年に就航し、500人もの住民らが港で旗を振って迎える姿は地域の結束を示すものとなった。この運動は地元高校生へと受け継がれ、さらに四国や岩手にも広がりを見せた。

島氏は活動を法人化し、マグロ一本釣り漁見学や街歩きなど体験型観光を商品化。地域で過ごす時間そのものを売る観光へと転換し、経済効果を高めた。2016年の北海道新幹線の開業に向けて、津軽海峡を挟む13市町村の女性たちと「津軽海峡マグロ女子会」を結成。このエリアのすみずみに旅人を迎え入れたいという思いで、寄り道旅プログラム「セイカン博覧会」を展開し、活動は関門海峡や八戸などにも波及した。特徴はリーダーを置かず、水平的なネットワークで補完合う点にあり、現在は94人が参加する大きな動きへと成長している。「自分のやり方を引き継ぐ必要はない。DNAを持つ人が新たな挑戦を起こす地域にしたい」と未来を展望し、講演を締めくくった。

第2部では、本学部の南雲勝志教授がファシリテーターを務め、島氏とのトークセッションが行われた。旗を振って観光客を迎えるあおぞら組の活動は、10年以上にわたり地域に元気をもたらしたが、やがて縮小。しかしその「DNA」は新たな担い手に引き継がれ、高校生らが再び旗振りを続ける流れを生んだ。この経験を通じ、活動が一度途切れても理念が人々の心に残れば再生できるという確信を得たと語る。

近年の取組みでは、マグロに偏りがちな町のイメージに対し、白身魚や揚げ物をテーマに「海の未来をあげあげに」と新しい価値を提案。資源保護のため漁獲枠が厳しく制限される中、孤独な戦いを強いられる漁師のイメージを超えて、地域の暮らし全体に光を当てる取り組みを進めている。またグッズ販売や観光協会の委託事業などの収益活動は、「まちづくりで食べていける会社」を実現させた点でも特徴的である。

学生からの「仕事や家庭との両立はどうしているか」との質問に対しては、オンライン会議や小規模な集まりを活用するなど、無理をせず長く続ける仕組みづくりを意識していると答えた。マグロ女子会結成当初は120%の力で走っていたが、いまは「おばあちゃんになっても笑い合える活動」を目指してペースを調整しているという。

対談の終盤、島氏は自身のスタイルを「天の岩戸を開けるために踊り出すアメノウズメのように、まず自分が楽しんで動くこと」と表現した。その楽しさが周囲を巻き込み、世代を超えて踊り続ける人々を増やしていく。南雲教授は、その魅力を「人間味と引きつける力」と評し、地域づくりにおける継承と皆を巻き込んでいくことの重要性を改めて強調した。



第11回～第13回「観光まちづくりカフェ」開催報告

2024(令和6)年10月から2025(令和7)年5月にかけて、計3回の「観光まちづくりカフェ」が開催された。

各地、各分野で活躍されている方から直接お話を伺いすることができ大変貴重な機会となった。

(講師の肩書・役職は当時のもの。文責:小林裕和)



「その土地と生きていく。～山村熊川宿での地域づくり～」

開催日: 2025(令和7)年3月3日(月) 講師: 時岡 壮太 氏 株式会社デキタ 代表取締役



第12回観光まちづくりカフェ第1部では、株式会社デキタ代表取締役である時岡壮太氏を迎え、福井県三方上中郡若狭町の熊川宿における観光まちづくりの実践が紹介された。熊川宿は、鯖街道の宿場町として栄えた歴史を持ち、保存活動を経て重要伝統的建造物群保存地区、日本遺産に選定された。

時岡氏は東京で施設開発やコンサルティング業に携わった後、「地域文化を生かした持続的なまちづくり」に取り組むべく地元へ戻った。熊川宿では空き家の増加が課題であったが、氏は一棟ずつ古民家を借り受け、改修しながら宿泊施設やシェアオフィスとして再生させてきた。代表的なのが分散型宿泊施設「八百熊川」である。村全体を宿に見立て、空き家を改修した一棟貸しの宿として提供する仕組みは、訪れる人々に歴史的街並みと生活文化を体験させるとともに、空き家活用の好例となった。

宿泊客への食事提供では、地元の婦人会や飲食店と連携し、伝統的な家庭料理を文化体験として提供。さらにEC販売やOEM商品開発を通じて、地域産品の販路拡大にも挑戦している。地元の方の協力を得て、伝統野菜「山内かぶら」の加工食品や、熊川葛の葉茶の製造販売などは、地域資源を現代的に生かした商品として注目を集め、テレビやSNSで紹介される機会も増えている。また、熊川宿の保存活動で育った世代と協働し、複合アウトドア施設「山座熊川」を整備。町と連携した公民連携事業として、宿場の保存を超えた山村全体の観光まちづくりへと広がりを見せている。利用者の年齢層は幅広く、キャンプ経験世代の中高年齢層も多いことから、新たな観光需要の掘り起こしにもつながっている。こうした取り組みにより、熊川宿では過去5年間で14軒の空き家が活用され、地域のイメージも「保存の町」から「高い町」へと変化しつつある。さらに外国人観光客も増加し、海外からの宿泊が2番目に多いなど、

国際的にも注目される地域へと成長している。

時岡氏は「地域に根ざした事業者が長期的視点で文化財を活用することが、持続的なまちづくりにつながる」と強調する。熊川宿を舞台とした挑戦は、観光を軸に地域資源を生かしながら、経済・文化・コミュニティーを再生する実践例として大きな示唆を与えている。

続く第2部では、本学部の吉見俊哉教授がファシリテーターを務め、時岡氏と学生や研究者との懇談会が行われた。学生からは「地域密着型の会社に就職したいがどうするべきか」「なぜ福井に戻ったのか」といった質問が寄せられ、時岡氏は「一度東京で資本主義の現場を経験した上で地元に入るのがいい」「地元に関わる機会は今はない」と応じた。また、「地域の女性や若手の力をいかに生かすか」が鍵であるとし、清掃や食事提供を担うスタッフと、オンライン予約システムを整備するスタッフの両輪で宿を運営していることを紹介した。



さらに議論は「多業化」「縦割り構造」「人材獲得」へと展開。熊川宿の事例は、建物保存にとどまらず、山林整備や食文化の継承など、地域全体を再生する包括的なまちづくりの姿を示している。研究者からは「地域女性の活躍の場を広げる取り組み」「全国的な古民家再生との差異化」が高く評価された。時岡氏は「補助金やスキームづくりも現場で試行錯誤しながら学んだ」と述べ、実践を通じて得た知見を共有した。

今回の講演とトークセッションは、地域資源を生かした観光まちづくりの可能性を示すと同時に、後継世代や学生にとって新たなキャリア選択のヒントともなった。熊川宿の挑戦は、地域と外部人材が協働し、経済活動をベースとしながら重伝建という文化を継承する、という実践例として注目される。

地域連携最前線

魅力ある観光まちづくりを実践している地域・団体と本学の学生・教員との交流や共同研究は年々活発になっていきます。

2024（令和6）年11月6日には、本学部の地域連携チームの担当教職員と包括連携協定を締結している岐阜県高山市、千葉県香取市佐原地区、三重県鳥羽市、愛媛県内子町、大分県由布市の5地域が参加して、「連携地域の情報交換会」を開催しました（大分県由布市はオンライン参加）。会議では、各地域の概況、学生・教員の受け入れ状況や効果・成果、本学部との今後の連携への期待などについて、有意義な情報交換が行われました。

さらに2025（令和7）年3月には神奈川県湯河原町と、5月には宮城県大崎市とも協定が締結され、包括連携協定締結地域は7地域となりました。

また本学部の正課「観光まちづくりインテンシブ」や情報提供型インターンシップでは、包括連携協定締結地域をはじめ全国各地域で学生を受け入れていただいています。



連携地域の情報交換会の様子

連携 I

学生目線で「温泉地・湯河原町への新しい人の流れをつくる」提案を（神奈川県湯河原町）

2025年3月28日、湯河原町と本学は、町の観光まちづくりに関する知識・経験等と大学が保有する知的財産・人材・技能等を生かし、観光まちづくりの分野で相互連携および協力することに合意し、協定を締結しました。

湯河原町は、人口約2.2万人の神奈川県西南端の町で、北側は小田原市や箱根町等と、南側は静岡県熱海市等と接しています。町域は、箱根外輪山の南東側斜面とこれに切れ込んだ二筋の谷地形からなり、南部の千歳川沿いには温泉旅館が集まり、北部の新崎川沿いの緩斜面にはみかん畑と住宅地が混在し、海沿いの狭い平坦地には市街地が形成されています。町では温泉と自然・歴史文化を生かした魅力的な体験・交流を実現するとともに、「おもてなしの心」に満ちた観光立町の実現を目指しており、観光まちづくりに実践的に取り組まれています。町には、協定締結の1年前から、3年生の観光まちづくり演習Ⅲの対象地の一つとして、全面協力をいただいで、学生の調査や計画・提案のフィールドワークを行って

地域マネジメント研究センター(CMI)の活動の一つが、包括連携協定締結地域をはじめ、魅力ある観光まちづくりを実践している地域や団体などと本学の学生教員との交流や共同研究の推進です。地域・団体と連携したさまざまな取り組みの中から、最近の主な動きを紹介します。

教授 十代田 朗

きました。現地で町民の方への報告会も実施しましたが、おおむね好評でした。

まだ前期の演習を行ったに過ぎず、学生の多くが湯河原町についてほとんど知らない状態で臨みましたが、最終的に町から本格的な事業として取り組みたいという提案もあり、一方的に町にお世話になるだけでなく、町にも何らかの貢献ができたと感じています。今年度も、より良い計画・提案ができるよう、学生も教員も頑張っています。

この演習では、「温泉地・湯河原町への新しい人の流れをつくる」を共通テーマとして、グループ別に現地調査や計画・提案を作成しますが、昨年度のグループ別の提案をタイトルのみ紹介します。

- 1 湯河原×ココロときはなツーリズム
（日本1のウェルネスツーリズムのまち湯河原町へ）
- 2 癒場所〜あったかい日々を送りませんか？
- 3 書く書く創作現代版 逗留 in 湯河原
- 4 湯河原まつりプロジェクト
- 5 歩こう！繋がる笑店街
- 6 湯河原町におけるみかん小屋の景観継承と活用
- 7 本で繋がる湯河原で結ぶ交流の懸け橋
- 8 サーフイン×ワークスペース
- 9 湯河原を照らす新しい道
（サンサン通り version 2.0）
- 10 湯河原の永久みかん



学生の計画・提案例



湯河原町との連携協定締結式
(左 内藤喜文町長と 右 針本正行学長)



演習での集合写真
(万葉公園にて)

連携 II

持続可能な農業と観光の融合に向けて（宮城県大崎市）

准教授 高和 雄

文化を一体的に支えるモデルとして高く評価されています。

2017（平成29）年には、大崎地域の伝統的な水田農業と一体となった景観・文化が「大崎耕土」として世界農業遺産に認定され、レストラン、農泊湯治などを組み合わせた食農体験のできる「たべるフィールドミュージアム」をコンセプトに、「大崎耕土ツーリズム」ともいえる持続可能な農業と観光の融合に取り組んでいます。

2025年5月の市と本学との包括連携協定の締結を機に、既に動き出している学生・教員との交流や研究のさらなる推進が期待されます。



大崎市との連携協定締結式 (左 伊藤康志市長と右 針本正行学長)



大崎耕土の農業景観
(写真：大崎市)

持続可能な鳴子温泉郷を目指した取り組み

教授 梅川 智也

五つの温泉地で構成される鳴子温泉郷は、環境省の国民保養温泉地に指定されています。それぞれ個性ある温泉街や効能豊かな温泉を備えており、国内に存在する10種類中7種類の泉質を有しています。しかし、近年、湯治客や団体客の減少等によりかつての元気を失っているのが現実です。そこで観光庁・高付加価値化事業の採択を契機として「鳴子温泉郷・持続可能なマネジメント」を設置し、私がアドバイザー兼コーディネーターとして参画しています。同委員会に本学部4年生12名が出席し、観光まちづくりの現場を経験しています。さらに3名は鳴子温泉郷を研究対象として卒業研究に取り組んでいます。



鳴子温泉
(写真：大崎市)



鳴子温泉郷・持続可能なマネジメントに関する検討委員会（梅川ゼミの学生も出席）

AIを活用して「けし」の系統認証研究

准教授 石垣 悟 / 専任講師 仲野 潤一

鳴子温泉地区は、古くから有名なけしの産地です。主に東北地方の温泉地で作られてきたけしは、形や模様、表情などから約10の系統があるとされています。鳴子温泉地区のそれは鳴子系です。大崎市にある日本こけし館は、鳴子系だけでなく各系統のけしを大量に収集している日本有数のけしの博物館です。私たちは、それらのけしのデータを整理しAIに覚え込ませることで、系統や産地、時代などの分からないけし（自宅にそんなけし、ありませんか？）を判定するシステムを作る試みを行っています。この取り組みからは、今まで目視では気づかなかったような系統間の関係性（伝播や変遷など）も見えてきそうです。もしかすると系統の見直しを迫られることになるかもしれません。

* 研究の正式名称…「画像識別モデルを活用した博物館資料の同定に関するデジタル変遷の研究」



日本こけし館での現地調査の様子



鳴子伝統こけし
(写真：大崎市)

連携 III

「蔵の街とちぎ 観光まちづくりシンポジウム」を開催
(栃木県栃木市)

教授 石本東生

2025年2月25日、本学部が共同研究協定を締結する栃木市において、福井県小浜市で観光まちづくり法人(DMO)「株式会社まちづくり小浜」を運営される御子柴北斗氏と、小浜市に隣接する若狭町の熊川宿にて地域再生事業に取り組み「株式会社デキタ」の時岡壮太氏をゲストにお招きして、「蔵の街とちぎ 観光まちづくりシンポジウム」福井県小浜市・若狭町熊川宿に学ぶ「」を開催しました。



シンポジウムの様子



パネリストの右 御子柴北斗氏と左 時岡壮太氏
(写真:ライター 井上理江)

ぞれ京都大学大学院 早稲田大学大学院を修了されたはば同世代です。また大学院修了後は、御子柴氏は農林水産省に、時岡氏は建築コンサルタンツ会社にて勤務された後、30歳を過ぎてから、それらの安定したポストを捨て去って、おのおの小浜と熊川宿にて地域活性化事業に身を投じられました。そして、お二人とも地域の歴史や伝統文化の文脈を十分に把握した上で、古民家再生型の宿泊施設を創出し、高付加価値の観光事業を展開中です。

一方で、地域住民との良好な協力関係の構築も注目されます。例えば、小浜においては、この6年間に従業員が30名ほどから70名までに増加、熊川宿では地域のご婦人たちが割烹着をまとって手作り夕食メニューを各宿に届けるなど、おのの雇用の創出にも大きく貢献しています。また、自治体、地域の金融機関との強力な連携にも目を見張ります。多方面にアンテナを張り、国や地方自治体のさまざまな補助金や助成金を最大限に活用しながら、地域の発展に寄与しておられるお二人の姿には、蔵の街とちぎの皆様も強く啓発されたようでした。

「観光まちづくりライブラリー」

たまプラーザキャンパス「若木21」1階のCMI内にある「観光まちづくりライブラリー」では、本学部における学びや研究に資する専門図書・資料を収集・保存し、情報提供しています。大学の図書館と同じように自由に図書や雑誌を閲覧することができます。資料の貸出サービスや資料相談(レファレンス)にも対応しており、いわば「観光まちづくりをテーマとした専門図書館」のような存在です。

観光まちづくりは、社会、資源、政策・計画、交流・産業など幅広い領域に関わっています。ライブラリーでは、こうした特性を踏まえて蔵書を独自に分類し、教員から選書の協力を得て、専門的かつ重要な図書約3000冊、専門雑誌約120タイトルをそろえています。

本学部ならではの蔵書(コレクション)の収集とともに、観光まちづくりに関わるさまざまな情報や地域とつながり、アクセスしやすい情報図書館を目指して機能とサービスの充実を図っています。

- ◆ 利用案内
 - ◆ 利用できる方
 - ◆ 開館時間
 - ◆ 資料の閲覧・貸出
 - ◆ 資料の閲覧・貸出
 - ◆ 資料の閲覧・貸出
 - ◆ 資料の閲覧・貸出
 - ◆ 資料の閲覧・貸出
 - ◆ 資料の閲覧・貸出



観光まちづくりライブラリー



温かみのある飛騨家具

地域に関わる資料が充実!

「地域を見つめ、地域を動かす」…本学部が掲げるキーメッセージにある通り、本学部はさまざまな地域が学びや研究のフィールドです。ライブラリーでは、地域を知るための特色ある資料や情報を提供しています。

1 連携協定締結地域関連資料コーナー

包括連携協定を締結している全国7地域—宮城県大崎市、神奈川県湯河原町、岐阜県高山市、千葉県香取市佐原地区、三重県鳥羽市、愛媛県内子町、大分県由布市(2025年10月現在)—に関する資料コーナーで、各地域の市町村史や地誌、郷土資料、地図、総合計画や観光計画書などがそろっています。

学生が連携協定締結地域への興味を深めたり、専門ゼミやインターンシップでの事前情報収集や研究などに活用されています。



連携地域関連資料と地域紹介パネル



2 地域情報誌コーナー

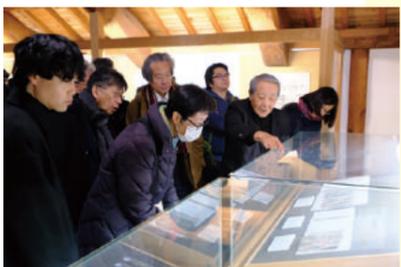
国内外のガイドブックだけでなく、現地に足を運ばなければ手にできない地域情報誌(ローカル誌)は、地域を知るための有益な観光情報メディアの一つです。地域の人々が主体になって作成し、市販のガイドブックにはない地域のとっておきの魅力を紹介している情報誌がそろっていることもライブラリーの大きな特色です。



全国各地から収集している地域情報誌



サンド教授の解説を受けながら伊勢神宮を参拝



伊勢河崎商人館(伊勢市)の見学



海の博物館(鳥羽市)でのレクチャー

F/D研修 伊勢・志摩地域エクスカーシオンを実施

准教授 松本貴文

2024年12月20日(22日)、「F/D推進助成事業」の一環として伊勢・志摩地域(松阪市、伊勢市、鳥羽市、志摩市)エクスカーシオンを開催し、観光まちづくり学部に関

わる教職員延23名が参加しました。F/D(Faculty Development)とは、教育内容や方法の改善を目的として研修等を実施する取り組みのことです。

残念ながら行程の詳細をご紹介することはできませんが、お伊勢参りと関わりの深い各地で観光やまちづくりに携わる自治体職員や専門家の方々からのレクチャーを受け、まち歩きを実施し、フィールドワークの過程で学生たちが直面する課題やその解決に必要な支援について理解を深めることができました。

連携地域である鳥羽市では、市役所で市の取り組みを紹介いただいた後、中心市街地周辺のまち歩きを行いました。近鉄中之郷駅にて連携事業の一環として取り組まれた鳥羽うみライブラリーも見学し、地域連携の成果の一端にも触れることができました。



横山展望台(志摩市)で集合写真

沖縄県のとあるDMO設立準備の会議で、某市の駅周辺まちづくり担当者や議論していて、東京都のほぼ中央に位置する人口約20万人の市で新しいイベントを考える市民団体の方と話しているときに、「あれ、このことって観光を進めるだけのことでもないし、まちづくりのことでもない。両方のことを話しているよね」とそう感じる瞬間がだんだん増えてきたこと、そして、それがなんとなく心地よく思えるようになったこと。



小林 裕和 教授
KOBAYASHI, Hirokazu
観光学、観光DX、
持続可能な観光、
地域旅行ビジネス、
DMO/DMC
文化観光

「道の駅とみうら枇杷倶楽部は、南房総の生産現場を支え、地元産品の加工・販売と共に交流促進や情報発信を担う地域の中核的存在」と熱く語る加藤元駅長の言葉に、学外授業に参加した学生は驚きの表情。地域グルメを楽しみ、お土産を買う施設というイメージだった「道の駅」が、観光まちづくりの重要な役割を担っていると学んだ瞬間でした。この学びによって、学生たちの「道の駅」への見方は大きく広がりと前進したはずで。



楓 千里 教授
KAEDE, Chisato
地域の観光情報
メディア



石本 東生 教授
ISHIMOTO, Tohsei
EUの観光政策、
文化観光

近年、私はEUの農村地域開発振興と公的補助金制度について研究を重ね、南欧ギリシャのクレタ島へ、年二度調査に赴いています。クレタの農村地域では、ハーバードやハイデルベルクなど欧米屈指の大学・大学院への留学経験を持つ若手人材の活躍をよく目にします。現地でアグリツーリズム施設やワイナリーを立ち上げ、誇りを持って地域振興に貢献しています。豊かな見識と広い視野、垣根を越えた協働により、地域ににぎわいを創出。まさに感動です！



浅野 聡 教授
ASANO, Satoshi
都市計画、景観計画、
防災・復興まちづくり

浅野ゼミでは、江戸東京ツアーと題して江戸期から昭和期までを対象に重要な建築や町並みを訪ね歩いていきます。これは自分が30年ぶりに東京に戻ってきたこともあり、東京を学び直したいと思ったことがきっかけですが、ゼミ生も行きたいとのことで始まりました。昨年は、芝、両国、上野、深川、門前仲町、佃島等を巡りましたが、全員で東京の観光まちづくりの現状を楽しく学ぶことができました。今後もツアーは継続予定です。

「山・鈴・屋台行事」が2016年にユネスコ無形文化遺産に登録されたとき。これは全国の祭礼行事33件を一括提案したもので、これほど多くの重要無形民俗文化財を組上に載せたのは我が国としても初めてのことでした。不安と期待が行き交うなか「採択」の知らせがくると、列島各地は一転ドンチャン騒ぎ——。この一連の対象は、そもそも見る×見られるという関係性で成り立つ都市祭礼でもあったことから、まちづくりの機運高揚の要因にもなったかと思えます。



小林 稔 教授
KOBAYASHI, Minoru
民俗学、
文化財保護論

私のフィールドは農山村で、観光地化されていない過疎地に行くことがほとんどで、逆に「観光」という言葉に対して他人事となっている地域の人たちとの付き合いが多いです。先日、長くお付き合いしている福井県若狭町の職員から課長就任の連絡が来ました。しかも機構改革で新設される「観光まちづくり課」だといえます。政策用語になったとはいえ、観光まちづくりの認知度の向上と、世間の観光まちづくり学部への期待が強く感じられる出来事でした。



高 和雄 准教授
KASAMI, Kazuo
都市農村交流、
移住施策



石山 千代 准教授
ISHIYAMA, Chiyo
地域デザイン、
観光計画、
歴史的環境保全

観光まちづくりのパイオニアである妻籠宿で町並み保存を先導してきた小林俊彦さんが2024年晩秋に逝去されました。小林さんは、地域の地名の由来やこれまでの取り組みと根底にある考え方について、その都度丁寧に書き記してくださっていました。いま、地元の方々はそのらあらためて収集し、読み返しています。過去に学び、地域の現在・未来を考え続けようという熱意と、その時に助けとなる丁寧な記録の大切さを目の当たりにして、胸が熱くなっている最近です。



井門 隆夫 教授
IKADO, Takao
宿泊産業論、
観光マーケティング

本学部には、希望者に紹介する夏休みの情報提供型インターンシップや海外スタディツアーがあり、毎年積極的な学生が応募しています。2年生で参加し、3年生、4年生と続けて参加する学生もいます。すると、偶然出会った地域の人とのつながりが、卒業研究の題材や一生の人脉となっていくのです。与えられるだけではなく、観光まちづくりの主體的な学びは、自らのキャリアまで変えていくインパクトを生み出していると実感しています。

伊勢神宮の歴史を研究しながら、その現在を考えることがよくありました。しかし、観光まちづくり学部の伊勢見学旅行で、その歴史と現在の絡み合いの乖離を改めて実感しました。かつて伊勢を訪ねることは一生に一回のイベントで、長い参宮街道を歩く時間も大きな意味を持っていましたが、今はバスで宇治橋の前まで移動し、内宮を見てお土産を買って帰る人が多いです。伝統的参宮体験をどう甦らせ将来に生かすかが、地域の課題だと思います。



ジョルダン・サンド 教授
SAND, Jordan
近代日本史、
建築史

私が「観光まちづくり」という言葉の意味を実感したのは、「観光まちづくり演習Ⅲ」で藤野を訪れたときでした。山あいにあるユニークなアート作品、ゆずの香りに包まれた収穫体験、市民が主催する手づくりのイベントや移住者と地元住民が協力して進めるまちづくりの様子——どれもが「観光」と「暮らし」が無理なく溶け合っている風景でした。観光とは、ただ見に行くだけのものではなく、そこに暮らす人との関わりや、地域の日常に触れる中でこそ、本当の魅力が深まっていく——そんな気づきが、自分の中に静かに芽生えた瞬間でした。



金 今善 准教授
KIM, Guemsun
地方自治論、
市民参加論

観光まちづくり学部専任教員紹介

この学部には、さまざまな分野での研究実績や現場経験を持つ教員がそろっています。学生自身の興味関心に合う専門分野を有する教員の下で、学べるのが本学部の特色の一つです。教員が「わたしが改めて『観光まちづくり』を実感したとき」についてコメントしています。

私が関わるまちは江戸、明治、大正、昭和の暮らしや町並みが生きており、国内外から訪れる方が年々増えています。しかし、歴史ある静かなまちに住む方の中には、生活の場を乱す「観光」に困っている方も少なくありません。本来は、まちに住む方と地域の文化体験を求めて来る方の力が合わさることで、まちの魅力が未来につながります。生活文化を守り、来る方と交流し、次世代につなぐ「観光まちづくり」を開拓している、と腹をくり直しています。



椎原 晶子 教授
SHIIHARA, Akiko
都市計画、
建物保存再生、
エリアアート

設立間もない観光まちづくり学部では、教員同士での共同研究が盛んに行われています。共同研究では丹波篠山市・三浦市・小浜市・若狭町を訪れ、観光集客のビジョンを描きながら空き家を宿泊施設へと甦らせることで町並みを再生していく先進的な取り組みについて、民間事業者の方から直接学び、考えるという貴重な機会をいただきました。私の専門である歴史的町並みと観光まちづくりは密接に関わっていることを実感しました。



黒本 剛史 助手
KUROMOTO, Takeshi
都市計画、建築学、
町並み保全



稲葉 あや香 助手
INABA, Ayaka
社会学、文化人類学、
メディア文化研究

調査で米国の日系人街を訪れたときです。ロサンゼルスのリトルトーキョーは、古くから現地日系社会の生業の場かつ観光地でもあり、戦時中の強制立ち退き、戦後の再開、コロナ禍といった試練に見舞われるたびに、日系・非日系を問わず住民が協働し、その困難に対処してきました。異文化の共存は国家レベルの課題として論じられがちですが、それもローカルな「観光まちづくり」の実践に埋め込まれていることを忘れてはならないと実感します。

数年前まで私は観光分野のコンサルタントでした。観光経済の課題や可能性を地域の人々に認識してもらうために、私は主に統計データを使ってきました。信頼性のある数字であれば、住民から首長に至るまで観光振興の意義を共有してもらうことができ、結果的に施策を円滑に進められるようになります。最近では観光財源の会議に参画することが増えましたが、財源制度を設計する上でも、データを基礎とした議論が重要だと改めて感じています。



塩谷 英生 教授
SHIOYA, Hideo
観光統計、観光経済、
旅行市場分析

都市計画は「住む」「働く」空間づくりをメインに考えてきましたが、近年はどの地域のまちづくり活動や委員会等でも必ず「訪れる人」視点での議論が加わります。在住・在勤といった従来の枠組みに収まらない地域と人との関係性を捉え、地域内外での交流や観光の在り方を議論する機会が増えました。駅・バスターミナル等の交通結節点や公共施設等の建て替え計画の際も、こうした議論が主流になってきたと感じます。



児玉 千絵 専任講師
KODAMA, Chie
都市計画、都市デザイン、
ストックマネジメント



梅川 智也 教授
UMEKAWA, Tomoya
観光地経営、
観光政策、観光計画

この20年余り、目先の利益を追求しがちな観光地で「まちづくり」の大切さを微力ながら主張してきました。先日、温泉地でのまちづくりの現場を学生に経験させたいと思い、ゼミ生12人を奥羽三名湯の一つ鳴子温泉郷に連れて行きました。ステーキホルダーが集まる再生に向けた住民会議に参加し、まさに観光まちづくりの現場を体験してもらうことができました。彼らの若い感性が少しでも生かされる観光まちづくりが展開されることを期待しています。



石垣 悟 准教授
ISHIGAKI, Satoru
民俗学、博物館学、
文化財保護論

令和7年3月、岩手県陸前高田市の博物館で開催された「陸前高田のオシラサマはいま」展。東日本大震災後の追跡調査をもとに、東北の謎多き家の神「オシラサマ」が展示されました。展示はSNSで大バズリ。期間中1万人以上が来館し、全国から大量のお供え用の菓子も届けられました。地域博物館では異例のことです。地域に今も息づく民間信仰が地域を超えて認知され、そして支えられている姿に博物館での観光まちづくりを感じました。

観光まちづくり学部に着任してから開始した百貨店の屋上神社の研究を通じ、地域と深く関わる機会を得ました。折しも屋上蛭子社の地域開放を検討していたトキハ百貨店本店(大分市)を対象に、蛭子社が地上から屋上へ移動した軌跡を明らかにしました。地域から多くを学び、成果報告会では地域の方々に喜んでいただき感無量でした。未来志向の対話も行い、ささやかですが、「地域を見つめ、地域を動かす」ことができたいと思います。



山島 有喜 助手
YAMASHIMA, Yuki
造園学、風景計画学、
神社、博物館と
観光まちづくり

昨年、出身の大学院専攻課程の創設20周年行事がありました。世界遺産の名を冠したユニークな学際的な専攻で、教員の専門も建築史、保存科学、造園、美術史、美学、観光、生態学など多様です。私は2期生でしたが、教員と修了生の振り返りコメントにみられたのは、バックグラウンドが異なる中で共通言語を見出す難しさ、専門分野の表し方の悩ましさ、新しいことに取り組む環境を楽しめる人が集まる面白さ、等々。どれも本学部にも当てはまることに笑いつつ、創ることの楽しさを改めて思いました。



藤岡 麻理子 准教授
FUJIOKA, Mariko
文化遺産学、
歴史的環境保全



仲野 潤一 専任講師
NAKANO, Junichi
情報観光行動論、
インタラクティブメディア、
機械学習応用

年末から春休みぐらいにかけて、大門先生との共同研究で、ハフモデルを用いた観光行動分析を行いました。私は、実際に観光まちづくりを実践できるような対象地を持たないため、観光まちづくりを具体的に実感する機会は少ないのですが、ハフモデルをこねくりまわして、分析的直感を得た感覚として、「観光まちづくりってこんな構造になっているんだなあ」ということがわかってきました。乞うご期待。



下間 久美子 教授
SHIMOTSUMA, Kumiko
文化財保護、
集落・町並み保全、
文化的景観保全

まちづくりという言葉は、観光以外にも、歴史、福祉、健康、防災等、主要なテーマを冠して使われています。いずれの場合も、文化は、テーマに即したまちづくりの推進力となるものです。人が自然に働きかける中で創造される文化は、土地が介在する「もの、こと、人」に広く複雑に浸透しているからです。景観、文化財、慣習、食事、交流等を通して旅が地域理解に繋がる様々な状況に、文化力と、観光まちづくりの良さを感じています。

本学部では3年生の前期に行なっている「観光まちづくり演習Ⅲ」の授業において、学生たちはそれぞれ地域の問題を幅広く取り上げています。さらに多方向・多様な提案を目にし、それは「観光まちづくり学部」が目指したビジョンだと実感しました。それぞれの教員から専門知識を学習した学生たちが、これから学ぶであろう知識を融合し、地域生活を向上させるために多視点から地域のことを分析し、将来図が描けるようになることを楽しみにしております。



楊 惠巨 専任講師
YANG, Hui-Hsuan
都市保全、都市デザイン、
ランドスケープデザイン

ゼミ活動での地域への訪問は、いつも新たな気づきに満ちています。私ならの対象地域の見方を提示し、学生の皆さんの感じたこと・考えたことをフィードバックしてもらうことで、一人一人異なる、地域へのまなざしの多様さ(これは観光まちづくりの基幹的な要素の一つだと思います)を実感するからです。持ち前の清新な視点に加えて4年間で身につけた専門性を携え、本学部で学んだ皆さんが社会のさまざまな領域で活躍される未来が楽しみです。



堀木 美告 教授
HORIKI, Mitsugu
造園学、観光計画、
観光資源論



南雲 勝志 教授
NAGUMO, Katsushi
公共空間に於ける
プロダクトデザイン、
杉を用いたデザイン
と地域づくり

宮崎県で駅前空間やまちづくりにいくつか関わりました。当初は抵抗勢力と目されていた鉄道会社が魅力的な駅前空間をつくるのがいかに大切かと考えを改め、まちづくりにもとても協力的になり、同時に列車や駅そのものにもデザインを導入し始めました。地域と力を合わせることで結果的にサラッと利益を上げている姿を見て、ああ、これが観光まちづくりなんだなあと感じたことを覚えています。



下村 彰男 教授
SHIMOMURA, Akio
風景計画学、造園学、
観光・レクリエーション計画

空間計画や風景計画に関わる研究者として発言する際に、経済的な裏付けを問われ、もどかしさを感じていた1990年代半ば、林野庁の受益者負担によるレクリエーション利用林の管理費用捻出に関するプロジェクトに参加しました。それ以来、域外からの来訪者が地域にもたらす経済的な効果に興味を持ち、各地で支払意思額調査等を実施するようになり、地域資源の管理のあり方や観光まちづくりについて考えるようになりました。

観光まちづくりの入口は、まち歩きです。この十数年、私はまち歩きにハマっています。基礎ゼミでも専門ゼミでもまち歩きをしています。東京都内のまち歩きならば『プラタモリ』に迫り、「ブラヨシミ」という企画も実施してきました。まち歩きを重ねていると、都市の地形や歴史的資源、まちの営みに敏感になります。しかも、まち歩きは地域のなかを旅すること、つまり地域内観光です。ですから、まち歩きは観光まちづくりの第一歩なのです。



吉見 俊哉 教授
YOSHIMI, Shunya
社会学、都市論、
メディア論

「観光まちづくり演習Ⅲ」という授業のご縁で、相模原市藤野地区に年に数回通っています。「芸術のまち」として知られる藤野ですが、観光まちづくりに関するさまざまな取り組みもなされています。私も豊かな自然を満喫できる「里山体験」や柚子園の見学、藤野の各所をめぐる陶器市などに参加し、地域の方々とお話するうちに「藤野っていい所だなあ」と強く思うようになりました。以上が、私が観光まちづくりを実感したときです。



松本 貴文 准教授
MATSUMOTO, Takafumi
農村社会学、
地域社会学



西村 幸夫 教授
NISHIMURA, Yukio
都市計画、都市保全計画、
都市景観計画

「観光まちづくり」を実感した瞬間——それは学部の先生方と一緒に訪れた松阪市の本居宣長記念館での光景です。2024年12月のことでした。宣長という人物がこれほど多才で好奇心にあふれ、誠実に自らの関心に向き合っているということを専門分野の異なるそれぞれの教員が共通して実感した瞬間でした。とりわけ彼が17歳の時に描いたという『大日本天下四海画図』の前で、全員が立ち止まって見入ってしまった時に、そのことを強く感じました。宣長も真摯に「地域を見つめ」ていたのです。



清野 隆 准教授
SEINO, Takashi
コミュニティデザイン、
エコジカル・デモクラシー
の都市デザイン

全国各地に足を運び、そこに暮らす人と交流し、一緒に活動している話を学生から聞く際に、「観光まちづくり」を実感しています。学年が上がるにつれて、ただ訪れるだけでなく、インターンシップやサークル、ゼミの活動で地域との関係を深めています。学生たちは、地域の人の温かさに触れ、仲間として受け入れられ、共に活動することにやりがいを感じて、地域を動かすメンバーとして育っているようです。

いま、観光とまちづくりの間にはいろいろな可能性がありそうです。たとえば、観光地でなくても魅力的なまちを訪ねる人、コロナ禍以降好きなまちに滞在する人、外から足繁く通ってまちづくりを手伝う人、移住し、やがてまちのリーダーになる人など、そんな人たちにまちでよく出会います。「住民」の定義を幅広く捉え直し、人の移動を前提にまちづくりを考え、そして観光のあり様を見通していく、そうした次代の観光まちづくりを実感しています。



米田 誠司 教授
YONEDA, Seiji
公共政策、滞在政策、
観光食マネジメント

外国出身の住民が多く暮らす団地で、出身や世代など異なる人々が交わりながら共に安心して暮らせるまちづくりに取り組んできました。生活習慣やライフステージの違う人々が暮らす中、「みんなにとって望ましい」まちや暮らしを思い描くことは簡単ではありません。しかし、住民の思いの背景を理解したり、みんなが思いを共有できる場をつくらすることで、進んだり後戻りしたりしつつも、前向きな変化も生み出せていると感じています。



圓山 王国 助手
MARUYAMA, Oukoku
都市計画、多文化共生



河 昴珍 准教授
HA, Kyungjin
PR (Public Relations)、
広報、メディア、
コミュニケーション

地域のPR動画をつくる授業を担当しています。好きなまちの魅力や、課題解決の糸口を探ろうと、共感を呼ぶストーリーや表現を工夫する学生たちの姿に「観光まちづくり」の可能性を感じています。地域の魅力は、関わる人たちが共に創り上げていく物語に相違しています。住民の思いと訪れる人々の期待を織り交ぜ、新たな物語を紡ぐ——。そんな視点からPRを軸に、観光まちづくりのあり方を考えていきたいと思います。



十代田 朗 教授
SOSHIRODA, Akira
社会学、観光計画、
都市・地域・国土計画

地方都市を旅していると「観光的観点を入れてまちづくりをすれば」と思う街にまだまだ出会います。例えば駅前再開発。多くは鉛筆のようなタワーマンションと全国チェーンの商業施設で構成され、まちの顔としての駅前の個性は景観的にも商業的にも失われ、画一化しています。来訪者を惹きつけるのは土地の歴史や文化を感じさせる路地や横丁です。再開発は防災などの観点からは必要ですが、今、街の個性を生かす手法を構築すべき時代が来ているのではないのでしょうか。

昨年、京都の静かな塔頭庭園を調査で訪れました。手入れが行き届いておらず、少し寂しげな小庭でした。ふと見ると、外国人の年配の男性が長い時間庭を眺めていました。話を聞くと、ドイツで10年以上茶道を学び、先生に勧められて来たとのこと。「有名庭園よりも美しい」と語り、修繕費として1,000円を寄付したそうです。異国での文化交流から生まれたこの訪問には、地域への静かな敬意があり、「観光まちづくり」の精神を感じた瞬間でした。



劉 銘 助手
LIU, Ming
造園学、風景計画学、
ランドスケープデザイン

本年4月より助手に就任した宮地俊介と申します。どうぞよろしくお願いたします。新任ならではの、組織のあり方そのものに日々「観光まちづくり」を実感しています。多様な先生方が集まっていますが、皆さん互いを尊重して教員間のコミュニティを大切にされていますし、新任の私に細やかに気を配ってくださるのでホスピタリティも感じます。学生の皆さんは、講義はもちろん先生方のお人柄からもぜひ多くを学んでくださいな。



宮地 俊介 助手
MIYACHI, Shunsuke
社会学



潘 梦斐 助教
PAN, Mengfei
文化社会学、
ミュージアム研究、
アート研究

着任当初、「観光」と「まちづくり」という組み合わせは言葉として曖昧で、現代社会の複雑さを映し出しているように感じていました。しかし、両者をつなげようと課題や卒業研究に真摯に取り組む学生の姿に触れ、そこに両者が共存する可能性を感じるようになりました。これからも学生と向き合い、共に「豊かなまち」や「豊かな生活」とは何かを探し続けていきたいと思います。



大門 創 准教授
DAIMON, Hajime
都市計画、交通計画

仕事柄、行政・鉄道事業者・ディベロッパー・設計事務所といった方々と委員会等を共にすることが多いのですが、再開発を手掛ける彼らと非公式な場で話す「内心、再開発しなくてもいいのではないかと」思っている」という話を耳にします。これは、現在のまちの魅力を保全する必要性を認識しつつも、ビジネスや立場によって想いとは異なる判断をせざるを得ない、ということを物語っていると思います。観光まちづくりを推進する上でのジレンマを感じます。

教員座談会 デザインと観光まちづくり アートと観光まちづくり

観光まちづくり学部では、デザインやアートに関連する科目をカリキュラムに取り込んでいます。地域と、デザインやアートのつながりについて、そして今後観光まちづくりを担う若い世代へのメッセージも含め、3人の教員にその醍醐味を語っていただきました。聞き手は宮地俊介助手です。

文：小林裕和 観光まちづくり学部教授

デザイン、アート、社会学、それぞれの視点から観光まちづくりへ

宮地：聞き手を務めます。宮地俊介です。専門は社会学、コミュニティ論なので今回テーマとするデザインとアートに関して専門ではありませんが、学生と同じような目線で、いろいろ聞ける場所もあると思います。この座談会を楽しみにしてきました。よろしくお願ひします。まずは自己紹介を兼ねて研究分野や取り組まれている活動などについてお聞かせください。

南雲：デザインが専門で、もともと家具などのプロダクトデザインをやっていたんですが、25年ぐらい前から景観デザインまで行うようになってきて、全国の地域のまちや通りなどのストリートファニチャーなどのプロダクト



皇居周辺道路車道照明

パブリックデザインが面白いと感じるきっかけになりました。家具デザインというのは、個人のためのデザインという感覚が大きいのですが、景観デザインは多くの人のためにつくり上げる。都市のスケールとか風景とかですね、そういう感覚なので、すごくやりがいがあるというか、まちをつくるという感覚があるので、これは面白いなと思えました。風景が美しいかどうかは重要な問題で、当時景観デザインが始まったばかりでしたので、この分野を一生懸命やっていたと思います。

宮地：当時はまだ景観デザインが遅れていたと。

南雲：はい。現在は、行政側も、ちゃんとデザインを考え、発注しないといけないとなり、景観に対する意識も変わってきましたが、当時は景観デザインそのものの意識がまだ低かった。

宮地：皇居周辺の行き来通りの照明デザインも南雲先生が担当されましたが、そのプロジェクトで大変だったことをお聞かせください。

南雲：皇居周辺ではとにかく時間がなかったんですね。今の天皇陛下のご成婚の2年前ぐらいに、なんとかしなければいけない、ということ。先ほども言ったように、景観と



聞き手：宮地 俊介 助手

南雲 勝志 先生

椎原 晶子 先生

潘 夢斐 先生

のデザインを中心にやってきました。まちづくりにはデザインはつきものだと思います。この学部ではデザインはメソッド科目と呼ばれていますが、本当は単なるメソッドではなく、まちづくりには欠かせないと思うのですけども（笑）。たとえばCAD（編集者注：コンピュータで設計や製図を行うためのツール）の学びはメソッドでよいのですが、デザイン一筋できたので、デザインが一番大事だと思っています。

椎原：私は東京藝術大学美術学部芸術学科に入学し、美学、美術史、アートの概念を学びました。アートやデザインを包括的に自分の

考えてみたいと思います。その学科に入ったのですが、大学3年頃から、徐々に建築や都市などの広いほうに関心が寄っていき、最終的には都市や環境をつくる仕事に関わりたくなりました。大学院では環境造形デザインを専攻し、ランドスケープ、駅前広場など、パブリックに関わる環境のデザインを学びました。

またそこで興味の幅が広がり、古民家や洋館など歴史のあるものをまちの中でどうやって生かしていくかを、地域の方や建築家の人たちと一緒に考える活動を始めました。その活動が、地域の人たちが自分たちで望んで家やまちなみ、文化を生かす方向に進み、卒業後は仕事として都市デザインに取り組みながら、地域のNPO活動のなかで歴史を生かしたまちづくりをしてきました。

アートと歴史を生かしたまちづくりについては、主に横浜や上野・谷中をフィールドに開ってました。

潘：出身は上海です。香港大学に入学して、1年目は理系でしたが、2年目から文学部に転部し、もともと好きだった美術史を専攻しました。

作品に込められている意味や、作家の背景に関心がありましたが、美術館でなぜ所蔵され、どのように展示されるのかにも関心を持ちました。

人の手で、自分の身の回りの環境をより良くしていくことで、それが広義のアートです。その中から、18世紀頃に科学技術とファッションアートが分かれていく。この場合のファッションとは、実用から離れた理想の美という意味を持ち、ファッションは明治の日本で「芸術」と訳されました。今、「アート」は、狭義で、ファッションを指すことが多いですね。

宮地：なるほど、アートの語源が理解できました。

椎原：一方デザインは南雲先生がおっしゃったように、目的のために何かを形づくる。必ずしもハードだけでなくソフトのデザインやしくみのデザインというのでも出てきます。ものを目的に合わせて形づくるデザインもあれば、物事がより良く進むようになくしくみのデザイン、いろいろな人を巻き込んで場をつくるデザインなどもあります。

ビジネスの世界でも、アート思考が必要だとか言われるのは、次元を飛び越えていくような発想を持つアーティストの思考が求められているからでしょう。

新しいものの見方がパブリックになるような行為ができる人が出てきています。

多様な形で、さまざまな立場の人たちの声を聞きながら、最適解はこれじゃないかと、ひとまず答えを出すのがデザイン、アートは答えは出さずに問いを繰り返し、本当にそうかと各人に本質に向かうことを迫る。大まかに言うと、そういう違いがある気がします。



芸工展の拠点となった明治町家、「谷中学校」の寄合処

谷中の大工棟梁による檜がんな実演と体験も広義のアート

1993年より谷中界隈の人々がものづくり・アートを発表しあう「芸工展」マップ1999年版



デザインとアートの役割と違い

宮地：南雲先生は、大学時代に専攻された室内建築から、どういった経緯で、まちづくりやパブリックデザインのほうに入られたのでしょうか。

南雲：景観デザインとはあまり縁はなかったのですが、たまたま東京大学の景観デザイン第一号者であった篠原修先生と皇居周辺の整備の時に一緒にさせていただいたことが、

生活とアートを結ぶまちづくり

宮地：椎原先生は研究のテーマで、アートとまちを結びつけるという言い方をされますが、具体的な地域でのプロジェクトやイベントでそのように考えるきっかけになったものがありましたか。

椎原：長く続けているのは谷中の「芸工展」というプロジェクトです。「まちじゅうが展覧会場」と言っていますが、1993年から始めて32年になります。それを始める前に、自分はみなとみらいや関内地区、象の鼻テラス、古い港町の様子をどうするか、などの、

横浜市の各所の都市デザインの基本方針を考
える仕事をコンサルタントとして手伝って
ました。山手の洋館を地域市民の憩いの場
に転換するなどの実践に関わらせていただき
ました。

都市デザインは10年、20年スパンで構想
して整備計画を立てて、その中の一つ二つが
徐々に実現することに関わるので、本当にや
りがいがありました。並行してさまざまな計
画が進んでいき、5年、10年経っていき、あ
れが今度できて、これが今度できて、そうす
ると横浜はこういうまちなんだって、行政や
市民、企業など皆の意識が高まっています。
時間をかけて多くの人々と都市をデザインし
ていく醍醐味を味わわせていただきました。

宮地…同時に谷中にも関わっていたのです
か。

権原…横浜と並行して関わった谷中の界限は
江戸時代からのまちで、震災、戦災で燃えな
かった地域には古い寺院や民家が残り、一方
で戦後の木造の多い住宅密集地もあります。
東京都の喫緊の課題は、そこを不燃の建物に
建て替えて、道路を拡幅し、不燃領域率を上
げることが優先になっていました。歴史を生
かしたまちづくりどころじゃなかったのです。

私が残したらよいと提案する建物は、行政
としては早く建て替えてほしいというぐら
いの勢いで。地元も、行政の方針に逆らって
で古いものを残せとはいえないだろう、みた
いな空気でした。

しかし谷中は江戸明治からのづくりの職
人や作家が多く、まちの人も自然と手作りに
親しむ土地柄で、家や植木棚にも手作りの技
や創意が溢れている。建て替えか保存かでは
なく、まちじゅうが「芸術家」で、お
互いの取り組みを見せ合うことでまちの魅力

しかし、欧米でも現代美術では、まち中
で起こる出来事自体をアートと捉えるよう
な動きや、あるいは「ライトニング・フィー
ルド」のように大きな風景の中で避雷針を立
てて雷が落ちてくる様子をアートとしたり、
風景、現象そのものをアートとして作品にし
たりとか、美術館から飛び出したアート活動
も生まれてきました。日本でも、1990年
代ぐらいから、画廊の人に認めてもらっただけ
ではなく私の同世代がまちに飛び出していっ
て、新宿少年アート、ザ・ギンブラート、あ
るいは秋葉原TVなど、画廊による箱（ホワ
イトキューブ）アートのシステムから脱して
いくことを、当時若手のアーティストやキュ
レーターが実践していました。

それはアーティストだけの特権ではなく
て、まちの人が植木鉢に水をやることや大正
時代からのガラス戸を毎日磨いていることな
ど、自分たちではアートとは言わないけれど
も、自分の手で、身の回りをより良くして、
生きやすくするという行動も広義のアート
じゃないかな、と気付きました。現代アートの
展開と昔ながらのまちの方々の住き生活
を重ねて考えるようになりました。

南雲…まちづくりデザインというのは、まち
の力を使ってつくる基本だと思いませんか。
デザイナーの作品をつくるのではなくて、ま
ちの力を総合して力を合わせて作っていく
みたい、そこに醍醐味やそのまちの人たち
にとつての嬉しさがあって、僕はそれをど
うやって吸い上げ、どうやって組み立てる
かに一番力を入れている。アートとデザイ
ンの違いはそこにあると考えています。

宮地…面白いですね。まちの力とい
うのは重要な言葉ですね。南雲先生ご
自身が地域の支えということにこだ

と発見と交流の場をつくらうとしてきまし
た。

宮地…谷中はまさにエリアアートの実践の場
なのでね。

権原…谷中界限はものづくりの人、アーティ
スト、アーティストを支援したい人も多く、
美術品の搬送や設営、画材制作、修復など、
美術界の裏方も含めて、アートに関わる人
が多くて楽しいエリアです。

一人一人が主体的に自分のつくるものをま
ちに発信できることを願っています。「芸工
展」という名称には、アートとデザインを
あまり区分けしなかつた時代のメンタリ
ティー、生き方の姿勢を込めています。

江戸時代までは絵師や鋳物師など職人さ
んがアートを作っていた。たとえば伊藤若冲
は絵師、運慶・快慶は仏師として、発注され
てしっかり答えを出すデザイナーでもあり、
新たなものの見方を広げるアーティストでも
あった。あまり職能が分かれていなかった時
代のものづくりへの態度が、未来を拓いたの
かもしれない。

江戸時代からのづくり・アートを支える
谷中の人たちだったら、個人から発信して、
まちの環境にそれが作用していくことに効果
が発揮されると思います。一人一人の創意工
夫が重なり合うまちづくりを、実際やってみ
たらどうなるのだろうか、とトライする感じ
で「芸工展」は始まりました。

地域資源から紡ぐ アートとデザイン

宮地…潘先生も谷中に関わられているとのこ
とですが、ご自身の研究はどの時代を対象と
されているのですか。

潘…幕末から大正まで、特に幕末から明治が

わかっていらっしゃる。

まちの力を生かしたデザイン

南雲…まあ、最近では地域らしさというの
はなくなったと言われている。ふるさと創生1億
円事業みたいな何か面白いことを、というこ
とではなく、地域の中にあるものをみんな
掘り下げて考えることが面白い。

たとえば秋田の駅前も、大阪の駅前も、あ
まり変わらない風景になってしまい、日本
全国どこに行っても変わらないのはつまらな
い。金沢や京都は違いが明確ですが、中規
模な地域では特徴のない同じような駅前広場
ではまずいと思います。駅前のデザインでは、
地域の素材をもっと使い、地域の人、子ども
にも参加してもらい、その地域の杉を皆で加
工し組み立てる工夫をしてきました。杉は日
本全国どこにでもあり、値段も手ごろとい
うこともありしたので。

宮地…人を巻き込むという話がありました
が、ワークショップなどもされているのです
ね。

南雲…地域の合意形成をきちんとやらない
と、お互い納得しないことがありますので。
たとえばデザイン提案をして、僕らが決める
のではなくて、市民に聞き、模型を見てもら
いながら、どうでしょうかと話をし、お互い
にやり取りするなかで生まれるものがありま
す。

市民から結構シビアな意見も出てくるし、
小学生や中学生の発言はシンプルで純粋なの
で、驚くような意見も出てくる。フアシリテ
ィアでは、東京工業大学（当時）の桑子敏雄先
生は合意形成のプロで、出雲の神門通りでこ
ろ一緒させていただきましたが、市民の取りま
とめ方が素晴らしい。

中心ですね。

宮地…その時代のネットワークやコミュニ
ティを見ているのですが、研究対象に
選ばれた理由を教えてください。

潘…日本における「美術」という言葉は、明
治初期、1873年開催のウィーン万博の際
それを海外に輸出して、その境界線を引いた
のは主に政府でした。

そこで私は、日本で芸術とかアートとかを
考えるには、やはり、このような原点に立ち
戻り、また、制度と巻、あるいは前近代との
間のやり取りというか、せめぎ合いを見るの
は重要だと考えていました。

たとえば、江戸時代から続く浮世絵や、
象牙品、中国古典を素養とする南画や漢詩
といった芸術や職人技は、東京美術学校（編
集者注：現在の東京藝術大学）では教えら
れなくなり、美術の制度の枠組みから排除
されるジャンルとなっていきました。

しかしながら、明治初期から中期にかけて、
上野周辺の下谷というエリアでは、そのよう
な作品が盛んに制作され、グループで創作活
動に励む人々が存在しました。彼ら・彼女
らのネットワークはきわめて濃密で、明治政
府の重要な官員がパトロンとして庇護・支援
し、南画や漢詩などが大いに隆盛しました。

現在では、詩や俳句、文学と、彫刻や工芸品、
さらにはデザインとの間に壁があるように感
じられますが、明治期当時にはそのような区
別はあまり意識されず、人々は集まって酒を
酌み交わしながら、共同制作や芸術談議を

宮地…ワーク
ショップのよう
なプロセスも含
めて、ひとつのデザ
インなのでしょう
か。

南雲…そのとおりで
すね。

宮地…南雲先生は佐渡
島の工場跡や、そのあ
とにストリートファニ
チャーのデザインも手
掛けられていると思
うのですけれど、たと
えば駅や観光地のデ
ザインを考える場合
は、何か大きく変わ
ってくるのでしょうか。

南雲…それはありますね。たとえば佐渡の
世界遺産に向けての整備の時は、主人公はそ
の世界遺産であって、僕らがデザインするサ
インやベンチは限りなく存在感がないほうが
いいわけです。そうすると観光課の人がやっ
てきて、これでは人が来ないのではないか、
これで何人観光客を呼べるのかという発想な
のです。

観光とまちづくり・デザインというのは、
敵と味方みたいな意識があって（笑）。僕
の中では結構苦しい思い出があって、魅力的な
まちをつくれれば、自然に人が訪れると思っ
ているのですが、観光客が先に来ると、費用対効
果や売り上げ、観光客が何人来るのかとい
う話が先に来ってしまう。でもそれは、まちづ
くりの後にある話ではないかと思うのです。
この学部ではどちらも同時にやろうとしてい
る、ということかと思っています。地域の人たち
が楽しければ、自然にそこにも人が来る、と

楽しんでいました。

宮地…潘先生のミューゼオロジーの研究では、
アートがいわゆる箱モノ的なものから飛び
出していき、1980年代くらいからエコ
ミュージアムという形で、地域とのつながり
を重視したアートの誕生を取り上げられてい
ますね。

潘…はい。人々の生活のなかに、いかに美や
技などが宿っているかというのは関心として
ありました。エコミュージアムの概念は、フ
ランスで地方復権の運動に応じて1960年
代に誕生し、1980〜1990年代には日
本に導入されました。現在では、政策の文脈
でもよく使われています。地域全体をミュー
ジウムと見立て、住民が自主的に企画を行い、
自分たちの資源を掘り起こして保存・継承し、
外に向けて紹介する動きが広がっています。

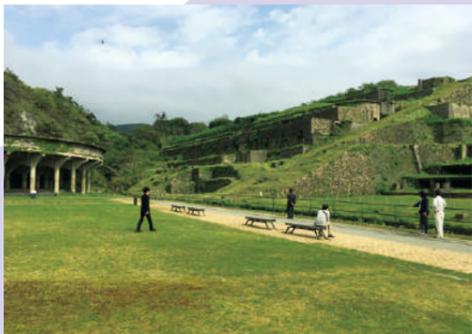
宮地…権原先生が先ほど話されていた、「芸
工展」の取り組みもそのひとつですね。

権原…美術史の流れで見れば、18〜19世紀
に西洋において絵画や彫刻などファインア
ート、芸術という概念ができ、貴族のサロンで
現実とは離れた理想像を絵画や彫刻で表す
大芸術がありました。でも19世紀の終わりか
ら20世紀になる頃には、それらへの批判があっ
て、分離派やウィリアム・モリスなどが家具
や建築など生活環境そのものが総合的な芸術
であるとした新しい流れがあって、もう一度
身の回りのものをより良くするのを見つめる
動きも出てきました。

でも、日本が欧州の博覧会に行き、近代国
家を目指していた時期に見たのは大芸術、絵
画・彫刻だったので、潘先生のおっしゃったよ
うに、明治に美術と翻訳したものは、欧州で
大芸術として定義されていたものになりまし
た。



神門通りワークショップ



佐渡相川北沢浮遊選鉱場前整備



思うのですが。
宮地…南雲先生は世界遺産
の平泉にも関わられたと聞
きました。
南雲…道路の整備とか世界
遺産に向けてのワークショップ
とかに関わったのですが、平泉
は残念ながら一度世界遺産選定から落ちてい
るのです。

構成資産の中尊寺や毛越寺は素晴らしい
のですが、そこへのアプローチとなる市民の
住まい、たとえば、前庭とか通り沿いのしつ
らえが良くない、世界遺産の町としてこれ
いいのかと指摘され、それで地元の意識が変
わりました。自分の関わる場所をもっときれ
いにしよう、もてなしの空間をつくらうとな
り、市民の意識が相当変わり、それに向け
てのワークショップも行いました。

結果翌年登録されましたが、後から
落選することも重要だったんだと、後から
思いました。

個人の感性
とまちの力

出品作品2例

潘…1年生向けの「文化社会学」の授業で、学生に「路上観察」をやってもらっています。2024年10月に、その授業の延長として、観光まちづくりライブラリーイベントとして「まち歩きの達人で賞！」というフォトコンテストを学内で開催しました。



作品名：しゃべるコーン

名前をつけた理由：
コーンは面白いので、時には喋ったりもします。

出品者：潘 夢斐（教員）



作品名：おでん

名前をつけた理由：
道路標識の影がおでんに見える。

写真のコメント：上から「はんぺん」「大根」「厚揚げ」「たまご」「ごぼう巻き」「こんにやく」。みんなの好きな具でオリジナルのおでんを作ろう。「すきなおでんの具は何？」肌寒くなるとそんな会話が飛び交うことのとんと平和で幸せなことか。影や雲の形が何に見えるか、よく一人遊びしていたなあ。出品者：秋山美月（観光まちづくり学部生）



まち歩きの達人で賞！イベントの表彰式の前夜、会場では教員と学生たちが展示された応募作品の前で、熱心に見入っていた

これは、1980年代後半に赤瀬川原平さんや藤森照信さん、林丈二さんたちがつくった「路上観察学会」という、ちょっとふざけた「自称」学会の活動をもとにしています。まちに出て、面白いものを見つけて写真に撮り、ユーモラスなタイトルをつけて共有する——遊びのようなものです。

たとえば、赤瀬川さんが名付けた「超芸術トマンソン」——都市の中で、もう使われていないのに、そのまま残っている階段やドアのような建築物や構造物——や、信号機、家の前に置かれた植木鉢など、日常的だけれどどこか面白く、少し変わったものを、学生たちが探してきました。

また、本学部の特別専任教授で歴史学者のジョルダン・サンド先生にも、コメントをいただいたりします。

観光でもない、まちづくりでもない。ただ、まちを見て歩き、楽しむ時間を持って、遊び心を大切にしたいなという思いで、みんな楽しんでやっています。

宮地…観光でもない、まちづくりでもない。でも観光にもまちづくりにも重要な考え方。



潘…そうですね。自分の感性を大事にして、一人の個人として「何を大事にしたいか」

「どこを面白いと思うか」を見つけて、それをみんなと共有する練習にもなっています。

南雲…何が好きかとか、何が嫌いかっていう判断は自分でつけるしかないじゃないですか。それが面白いものを見極められない。

宮地…いいと言われているからいいと思っちゃうとかじゃなくて。

南雲…いいと言われたけど、少しも良くないとか、そう自分で思うことが大事ですね。

宮地…自身の専門の社会学の視点だからこそできるもの、ものの見方、考え方みたいなことも考えてみたいですね。

南雲…アートの話になりますが、たとえば僕は新潟県出身なのですが、「大地の芸術祭」(新潟県「越後妻有」の里山を舞台にほぼ3年に1回開かれる、20年以上続く芸術祭)

ていられなくなる。やはり個人個人の視点、主観が大事であって、学生にはそういうところを、ものの見方を磨いてほしい。

観光まちづくりの
未来と人材育成

宮地…学生へのメッセージもお願いします。

潘…エコミュージアムは、誰でも学芸員になります。実は誰でも社会学者にもなれます(笑)。私が学生におすすめしたい方法のひとつは「参与観察」です。ミュージアムやアートに関心がある人なら、ミュージアムやアートのインターシップはひとつの方法です。インタンのほか、私自身もかつて国立新美術館のショップでアルバイトをしていました。そこでは、どんな人が来て、何を購入していくのかを観察することで、学芸員のオフィスや展示室の中では見えてこない側面を知ることができます。

南雲…自分の目で実際に確認して、「何が起きているのか」を自分なりに考える。そうやって、観光まちづくりの中でも、いろいろな課題を見つけてほしいと思います。

南雲…感じる人間になってほしい。自分がまちや人やものを見てどう感じるかということ意識できる人間。無関心でいてほしくない。アートフェスティバルも、みんながいろいろ言うけど、実際どうなのだろうみたいな目をちゃんと持っている。ここちよかったなみたいなこの感じはなんだろうと、ちゃんと考えられる人間になってほしい。

南雲…大学は、自分探しに来るようなところがあるじゃないですか。でも自分探しに来たのにむやみにAIを使うと、どんどん自分を自分でなくともいいものに置き換える訓練をすることになってしまい、就職してもきつ

について、最初は結構批判的でした。親と近しい農家の方たちがたくさん住んでいるところ突然アートが出現する。自分たちの庭におかないでくれみたいな思いがあったのです。

でも、今では理解できるようになりました。1年や2年ではやっぱりわからない。それを5年、10年続けているうちに、観光的にも人が増えてくると、地元もこれは自分たちの地域のためになるんだと意識が変わってきて。その転換点が7、8年経ってからです。

南雲…北川フラムさん(大地の芸術祭のアーティレクター)と話したら、地元からの反論反発は想定済みだったというのです。

潘…越後妻有では、4年半で二千回もの説明会を開いたそうです。それから、2004年の中越地震も大きな転機でした。都心に住んでいた芸術祭のサポーターたちがボランティアとして被災地に入り、地元から歓迎されるようになって、それに伴って芸術祭の受け止め方も変化したという。

南雲…たえば3Dのスペシャリストは図面を描いて、3Dで見せる仕事をしている。それよりも、自分で描ける範囲で思いを表現するほうが、説得力もあって、3Dの精密さよりも、手描きの見せ方のほうが、観光まちづくり学部っぽい気がします。

南雲…手描きであれば、山の奥に行っても紙と鉛筆があれば、これがいいですよねって見せられますね。ワークショップでは、ファンリティーグラフィックとかでも使えますし。

南雲…訓練するのだったら、テクニカルな訓練じゃなくて、感性とか腕を磨くことが大事。南雲…まちの人にいいところって何ですかって聞くと、大概の方は「別に、ここに生まれて住んでいるだけだから当たり前すぎて、いいところはわからない」ってよく言われるんですよ。学生をまちに連れていき、このま

ちでいいと感じたところを地図に書いてもらい、まちの人に発表すると、必ずしもまちの人がいいと思っていたところじゃないところを、学生がいいなって言ったりします。それをちゃんと聞いてくれたまちの人が、「若い人の発見から自分たちも学びました」と言っ

て下さる。外からの人の目で地域のいいところを見るのは、明治期に北日本を旅した英国人イザベラ・バードのように、対立概念じゃなくて、お互いの文化のカードを見せ合うような感じだと思える。そういう交流のきっかけが滞在だったり、ワーキングホリデーだったりする

南雲…小学生は本当に純粋なので、僕らとは全く違うところに気づくので面白いんですね。宮崎県の日向でまちづくりワークショップを行った時の小学校3年生が、この間、同

窓会やったら35歳(笑)。あの時のワークショップを、今でもはつきり覚えていてくれたことが嬉しかった。

南雲…子どもたちとワークショップをするのが記録になり、後から振り返ると自分が言ったことが蘇り、古いものを残そうと思っ

たきっかけになる。築70年の建物などを築100年、150年にしていこうとすると、今2歳や10歳の子どもたちが残そうと思わないと残らないので、夏休みに子どもたちと古民家体験する機会を折々つくっています。

南雲…観光まちづくりは30年、50年、多くの人が関わり長いスパンで続くものなので、一人が主體的に、これがいいとか面白いとか、私はそう思わない、でも私私私が好き、いやそれでいいじゃない、みたいな、お互いのものを見方を発見できる会話をし続けてほしい。そうなるためにも、あらゆる世代の人たちが、広い意味でのアート・デザインを自分が参画できるものとして、捉えてもらえ

ばいいですね。宮地…本日はいろいろな興味深いお話をありがとうございました。

南雲…小学生は本当に純粋なので、僕らとは全く違うところに気づくので面白いんですね。宮崎県の日向でまちづくりワークショップを行った時の小学校3年生が、この間、同



日向市まちづくり特別授業「移動式夢空間」

研究クローズアップ

分野を横断する「観光まちづくり」

下間久美子教授に
文化財とまちづくりについて
語っていただいた。

(本記事は、國學院大學広報課が2024年10月1日に行ったインタビュー記事に下間教授が加筆し、再構成したものです)



下間 久美子 (しもつま くみこ)

博士(工学)。1967年生。大学で建築学、大学院で都市工学を専攻。1994年より文化庁に勤務し、ユネスコ世界遺産センター等にも出向。2022年より現職。専門は文化財保護(建造物、集落・町並み、文化的景観)。趣味はタップダンス。

文化財を伝えることは 地域社会を 伝えることである

地域資源として文化財を活かすとは

「生きてく観光資源として文化財を活用することは、地域にとつて一挙手一投足で実現できるものではない。文化財保護の制度を自発的に取り入れ、住民が納得できるかたちを模索してきた実践例が、日本各地で見られるようになった。下間久美子教授は、文化庁の職員としてその最前線に身を置いてきたプロフェッショナルだ。インタビューで浮かび上がったのは、文化財と「人」という観点だ。

歴史×計画×社会 文化財保護

私の専門は、文化財保護です。建築や集落、町並み、文化的景観を守り、地域の発展に活かすことを主軸としているので、都市保全の側面もあります。この分野を選んだのは、建築学を学んでいた大学4年生の時でした。所属していた日本建築史研究室の大河直躬先生



撮影: TAKAHISA (PIXTA)



ラオスのチャンパサック県にあるワット・プー(上)と1996年に創設されたワット・プー保存のための関係省庁調整委員会集合写真(下)

文化財保護の 実務からの学び

文化庁で働きたいと思ったのも、大学院時代に素晴らしい先輩方との出会いがあったからです。文化庁に入庁したのは1994年です。その2年前に日本はユネスコ世界遺産条約を批准し、文化庁からユネスコに職員派遣を行う検討がなされていました。運よく1995年から2年間、ユネスコに出向して世界遺産センターとバンコク地域事務所の世界遺産業務にあたることができました。この時に、途上国支援として文化財保護を女性の地位向上や貧困対策と一体的に考え、プロジェクトの企画や実施を経験したことも、大

きな糧となりました。このような20代の経験の中で、文化財との向き合い方や、文化財保護において自分が目指したい方向が、自覚できるようになりました。

文化庁に28年間勤務の中で、最も長く、深く関わったのは防災や活用の促進です。若い頃の仕事で思い出しに強く残っているものは、『文化庁月報』(WEB広報誌「ぶんかる」の前身)という機関誌に文化財建造物の防災(2000年1月)、修理(2000年6月)、環境保全(2005年7月)の考え方や、現状と課題を伝える特集を企画・担当したことです。

この頃は、文化財所有者を始めとする様々な方から「文化財は釘一本

生が長野県の調査を行っていたので、須坂市に同行し、民家の図面をとる作業をさせていただきました。

歴史も好きでしたが、設計も好きだったので、大学4年生の時には前半で卒業研究を、後半で卒業設計をしました。また、日本の古建築も好きでしたが、幾何学的な形と用途の合理性が結びついたルネサンス期の理想都市にも関心があったので、卒業研究ではユートピア文学における都市の形をテーマにしました。トマス・モア著、平井正穂訳『ユートピア』(岩波書店、1957年)、ウィリアム・モリス著、松村達雄訳『ユートピアだより』(岩波書店、1968年)等です。結果、ユートピアの実現は、都市の形よりもむしろ格差をなくした公平で平等な社会の仕組みに希望を託しているという気づきを得ました。

一方、卒業設計は、1980年代後半のバブル経済期の風潮を捉え、卒業研究の成果とは真逆のコンセプトを置きました。個々人の幸せの集積が社会の幸福度を上げるという発想の下に、プライベートが徹底的に保たれた団地設計を試みたのです。結果、先生方から異口同音に「むなし」という感想をいただきました。私自身も同様にむなしさを感じ、調査で見た地方の地縁社会の良さに改めて関心が向きました。形と仕組みの関係が発端にあるので、今でも、文化財を見ることは人を見ること、文化財を伝えることは地域社会

も打てない」という苦言が聞かれました。文化財の現状変更規制が厳しく感じられる状況は否定できません。でも、制度とその運用の考え方が所有者や管



理者の方々にもっとよく伝わっていたら、御苦労が少し軽減されるのではないかと感じられることもありました。文化財の建物の中や近くでは火を使つては危ないとして、火気厳禁としているところがあります。一方、囲炉裏や竈を使いながら今日に至っているものもあるわけですね。最も危ない状況の一つは、人々が火の管理の方法を忘れていたり、怠つたりしてしまうことだと考えています。同様に、文化財を規制だけで守ろうとすると、人を建物から遠ざけ、必要な維持管理の慣習が失われてしまいます。施策としての活用の促進は、いわゆる「厳格な保護」を見直し、本来あるべき管理の目と手を時代に合った方法で取り戻すことです。その入り口として、文化財保護行政の仕組みや考え方をわかりやすいものにしたという思いが常にありました。



重要文化財熊谷家住宅(島根県大田市)における体験学習
大田市大森銀山伝統的建造物群保存地区(左上)にある重要文化財熊谷家住宅(左下)
2006年4月より公開が開始され、子供の体験学習や来館者のもてなし等のために電が使用されている(右:提供 大田市教育委員会)

須坂市須坂伝統的建造物群保存地区(長野県)
1989年度に実施した保存対策調査から約35年を経て、2024年に重要伝統的建造物群保存地区に選定された。写真提供:須坂市



を伝えることだと思っています。歴史にも計画にも携わりたかったので、大学院では都市工学に分野を移し、都市デザインとして町並み保存を学びました。指導教官は本学部の学部長である西村幸夫先生です。大学院では、先生にご紹介いただいて、新潟県村上市、岐阜県古川町(現・飛騨市)、長野県須坂市、新潟県相川町(現・佐渡市)、奈良県橿原市等、様々な場所で調査研究を行いました。たくさんのご縁をいただき、たくさんの方々にて育っていただきました。



南木曾町妻籠宿伝統的建造物群保存地区（長野県）保存地区に近年開店したコーヒESHOPの外観（上）と店内（下）

文化財保護に求められる柔軟性

私が関わってきたのは、「有形文化財」としての建築都市遺産です。歴史的な建物の多くは、建てられてから何度か改修されています。有形文化財では、その改修の経緯を解体調査で明らかにし、最も価値ある時代の姿を表わす「復原」が行われます。技術や材料、社会的・文化的背景等を知る上でも大切な行為です。明治初期にジョサイア・コンドルが工部大学校（現・東京大学工学部）に建築学の教師として来日し、西洋建築学を教えますが、この時に建築史という考え方も入ってきます。日本に建築史学を発展させる上で、解体調査と復原は重要でした。医学の発展に解剖学が不可欠であることと似ているかもしれません。



思い出に残る仕事
文化財建造物の保護の考え方や現状と課題をできるだけわかりやすく伝えられるよう、文化庁月報（文化庁編集、ぎょうせい刊行）の平成12年1月号で防災、同年6月号（表紙写真は三沢博昭撮影）で修理、平成17年7月号で環境保全を特集した。

中心に発展した解体調査が、戦後に多くの民家でも行われるようになります。一方で、「民俗文化財」としての民家は、それが人々によって使われ続けてきた姿に価値があるとされるので、人が使わなくなっても現状の維持が基本とされ、復原は通例行われません。人々の生活の変遷を解き明かす民俗学は、建築学を含む多様な分野と関係します。民家の保存活用に関する歴史には、大正期から昭和初期にかけての生活改善運動も含まれます。「復原」も大事な行為ですが、人の営みや、その跡を消さない有形文化財の保護のあり方を許容することも大事です。施策としての活用の促進は、対象に応じて保護方法の選択肢を増やすためのものであるとも考えています。

保存と活用をつなぐ地域の関与

NP O法人や市民団体との協働の在り方を発展させるための調査研究を2004年から2年で行い、2006年に委託事業を立ち上げたことも、思い出に残る仕事のひとつです。2003年に地方自治法が改正されて指定管理者制度が導入されると同時期となります。その少し前には、文化財建造物の活用事例集を作成する仕事にも携わりました。

白黒をつけやすいのですが、文化財や自然環境のように、定性的基準によるものにはグレーゾーンがあります。そのため、審議会の意見やアセスメントの結果を判断に用いているのだと思いますが、文化財が生活文化に近いものほど、その保護の在り方の判断に地域住民が関与する必要があると考える方が、国内外で広がっています。

国宝・重要文化財の指定の権限は文部科学大臣にあります。一方で、重要伝統的建造物群保存地区や重要文化的景観の選定は、関係自治体の特徴や特性を調査し、文化財としての価値を見だし、それに見合った保存計画を立てた上で選定申請を行います。選定申請がなければ、どんなに貴重な集落・町並みも、文部科学大臣は選定できません。国だけ

が力を入れても、地域の人々の理解と主体性がなければ集落や町並み、景観の保護は難しいからです。でも、結局は、全ての文化財が、所有者や地元の人々の理解と参加をなくしては長続きしません。今、「参加」と申し上げましたが、本来であれば、「自発性」というべきかと思えます。行政が行う保護に地域の人々が参加するのではなく、人々の保存の意思と取り組みを行政が支援するという方が望ましい在り方です。

まちづくりが人権と交わる時

「まちづくり」という言葉の定着には、幾つかの背景があります。集落・町並みの保存においては、昭和40年代から50年代にかけて、「保存」が懐古主義により経済開発を止めるのではなく、地域の成長を促す手段であることとを表明するために用い始められました。慣れ親しんできた生活環境、自然環境、文化環境を行政や事業者の考えや利益のためだけに勝手に変えないでほしい、壊さないでほしいという主張が込められています。でも、最近では、省庁も自治体も、自分たちの施策を通すために「まちづくり」という言葉を多用しています。まちづくりの支援のための様々

ことから議論を積み重ねる必要があったことを覚えておきます。「指定管理者制度で文化財を結婚式場として使ってもいいんですか？」といったお問い合わせの電話を受けたこともありました。活用の良い悪しは、用途よりはむしろ文化財の良し管理につながるかどうかで判断するものと考えていますが、こういう質問が出るほど、日本では保存と活用がかけ離れたものだとも思います。

前述の長野県南木曾町の妻籠宿では、歴史的な町並みでコーヒーを出してもよいかという議論も行われたと聞きます。笑い話のように思えるかもしれませんが、歴史的な町並みにふさわしいものとは何かを真剣に議論したという視点で振り返る必要がある事例ではないでしょうか。最近では、人を呼ぶためや儲けのためであれば、歴史的な建物や町並みをどのように使っても許されるような風潮も感じられます。その価値を損ねるような使い方、それを継承してきた人々の心情を傷つけるような使い方は、文化財の活用ではありません。高付加価値化という言葉が耳にしますが、本質的な価値なくして付加価値は成り立ちません。時間を正確に刻めない腕時計はデザインが優れていたり、多機能であっても、時計として劣るとは感じになりません。

難しいのは、活用のために現状を変更する必要がある時に、何をどこまで許容できるのかを判断することです。建築基準法のように数値基準があるものは、

法定計画や事業が、調整や協議の不足のために、かえって地域の取り組みに行政の縦割りを持ち込んでいる状況を見るのは、とても残念です。国連が示す「人権」は、人が人らしく尊厳を持って幸せに生きる権利を指し、文化を享受する権利もその中に含まれています。近年は、「ビジネスと人権」として、人権を確保し、持続可能な社会と経済発展を実現するために、政府や自治体のみならず、どのような企業も、生活者や消費者、市民社会等とパートナーシップを構築する必要が唱えられています。主要な人権リスクには「企業活動により、先住民や地域住民のあらゆる人権を侵害すること」が含まれ、生活や文化、宗教への負の影響もその内です。2024年5月に、国連人権理事会における担当作業部会が日本の状況調査（2023年7月24日～8月4日）に関する最終報告を公表しました。その中では、大規模開発における環境影響評価の過程にパブリックな協議が不足している事例として神宮外苑の問題が取り上げられています。実際には神宮外苑だけではなく、国内各地で同様の問題が見られる中で、歴史的な建造物や集落・町並み、文化的景観を巡る議論が「人権」とも結びついていることに思いを巡らせていただければと思います。そう、このことはどこまでも、人が尊厳を持って幸せに生きる権利を巡る問題なのです。

地域と歩む博物館

未来への約束 —陸前高田市立博物館の東日本大震災—

陸前高田市立博物館 副主幹兼主任学芸員 熊谷 賢

中心に資料収集を進めてきた。これにより、博物館の限られた人的体制での資料収集の限界の打破と円滑化、資料収集の中核に市民の参加が可能となった。中でも世界三大漁場の一つである三陸沖を背景に展開されてきた沿岸漁業の漁具は、長年の漁の経験に裏付けされた資料情報とともに収集され、三陸海岸南部に位置する広田半島とその周辺地域で使用されてきた「陸前高田の漁撈用具」として、2008年3月に国の登録有形民俗文化財に登録された。

津波被災からの文化財指定

2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震によって発生した大津波は、博物館と職員全員を飲み込み、資料の多くが流失し、残った資料もすべてが被災した。さまざまな被災物と土砂に埋まった館内からの資料の救出活動は3月30日から開始したが、漁撈用具のある2階展示室及び収蔵庫に着手できたのは4月21日だった。翌日には、閉校となった小学校に資料移送を開始し、大型資料を除き救出が完了したのは、6月17日だった。

救出した資料は、海水を含み、津波によりヘドロや土砂などが固着しており、そのまま放置することは著しい劣化に繋がる。しかし、資料も設備も整っていない状況では、簡単な水洗いとさまざまな容器を使った脱塩くらいしかできなかった。その後、岩手県立博物館において紙製資料の安定化処理方法が確立され、漁撈用具などの民俗文化財の一部にも処理が実施され、連続と続く本格的な安定化処理作業が始まった。救出された漁撈用具は、磯物採取、陥穽漁、突漁、釣漁、網漁など12分類に分けられる。その素材も鉄、木、繊維、植物など多岐にわたるため、それぞれの素材に適した処理が必要となり、除泥↓脱塩↓除菌↓脱塩↓乾燥↓経過観察という工程を経て、

はつらつ

東日本大震災による壊滅的な被害を受けた岩手県陸前高田市に2022（令和4）年11月5日、陸前高田市立博物館（以下博物館）が11年8ヶ月ぶりに再建・開館された。博物館の歴史は古く、1959（昭和34）年1月20日、東北地方における公立博物館第一号として開館した。その後、地域に根差した総合博物館として市民の協力を得ながら着実に歩み続けていたが、2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震に起因する大津波により、半世紀以上にわたり市民とともに蓄積してきた「ふるさとのたから」は、守り続けてきた博物館とともに壊滅的被害を受けた。



東日本大震災から11年8ヶ月ぶりに再建された博物館

本稿では、開館以来市民とともに歩み、作り上げてきた約56万点に及ぶ「たからもの（コレクション）」が、文化財保護法制定以降最大の自然災害である大津波により、壊滅的被害を受けながらも、全国の専門機関の協力と市民の手により再び博物館に戻り、陸前高田の自然・歴史・文化を震災の記憶とともに伝えられるようになるまでの取り組みについて触れてみたい。

まず、博物館に

被災後の当館の収蔵資料は約46万点に及ぶ。総合博物館という性格上その資料は土器・石器・骨角器などの考古資料、漁具や農具などの民俗資料、岩石・化石・植物・昆虫・貝類などの自然史資料から昭和のマンガに至るまで多岐にわたる。これはあの津波で犠牲となった先輩学芸員の「どのような資料でも収蔵しておくこと」によって、調査研究、展示のテーマの幅が広がる。」という信念によるものであった。

収蔵されていた資料は、発掘資料など一部の資料を除く99.9%が市民からの寄贈である。

持ち込みによるものや電話での照会などが主であるが、このような寄贈は、資料となるものを処分する前に「まず、博物館に」という意識が半世紀以上にわたる地域に根差した博物館活動によって少しずつ市民に定着してきた結果である。

漁師が育てた「陸前高田の漁撈用具」

1995（平成7）年度から市民から寄贈される資料の収集体制の強化と、家の建替えや世代交代などによる資料の消滅を防ぐため、地元漁師を「民俗文化資料収集協力員」に委嘱し、情報提供と収集への協力をいただき、漁具を



津波により壊滅的被害を受けた展示資料



国重要有形民俗文化財に指定された「陸前高田の漁撈用具」

置いた。

そして、被災から12年が経過した2023（令和5）年3月、長きにわたる安定化処理作業と地元漁師による修復作業、そして、聞き取り調査による情報復元により、陸前高田の漁撈用具は、被災資料として初の国重要有形民俗文化財に指定された。市民と博物館が手を携え、諦めなかった成果が大きく結実した。

ふるさとのたからには失われていない

我々を支えた1枚の書置きが、被災した博物館作業室の一角に残されていた。「博物館資料を持ち去らないで下さい。高田の自然・歴史・文化を復元する大事な宝です。市教委」と記されていた。

震災から3週間で文化財レスキューを開始した我々に「そんなものより人を探せ」、「そんなものを捨ててしまえ」と声を荒げる人もあった。一方「ここに来れば高田のものが何か残っている」と思ってきた」と被災した博物館に足を運ぶ人もあった。

被災直後、人々は懸命に自分が生きた証を家の跡地で探していた。自分が自分である証、それは自分の歴史でもある。博物館の資料や文化財は陸前高田が陸前高田である証。新しい町は時間の経過とともにできてくるが、その過程で失うものは数知れない。きれいな町ができたとしても自然・歴史・文化を伝えるものがなければ、モノだけで、ココロがなくなってしまふ。

陸前高田市立博物館

岩手県陸前高田市
高田町字並杉 300-1



詳しくはこちら

博物館情報

初めて修復できる。修復については、文化庁の担当者と被災状況を確認しながら、修復方法、使用する素材等について協議して決めるが、修復において最も重要なのが、地元漁師の協力だった。博物館では、前述した民俗資料収集協力員として1995年度から携わっていたにいたる

地元漁師の存在なくして、漁撈用具の修復は不可能であった。漁師としての経験に培われた修復技術と民俗資料収集協力員としての博物館資料の扱いには、文化庁の担当者も絶大な信頼を

受け継いだ展示

再建した博物館の常設展示では、海を悪者にせず、その素晴らしさを伝えることを心掛けた。展示室で最初に来館者を迎えるのは、あの1枚の書置き。資料を残すことの意味を伝える博物館再生の象徴である。そこから大地の成り立ち、「奇跡の海 三陸」・「海を崇め 海に抗わず 海と生きる」・「資料が語る陸前高田の歴史」・「博物学の世界」・「宿命（津波）」とともに生きる「ふるさとのたから」は失われていない。「貝たちの部屋」・「発見の部屋」・「発見の壁」の10のテーマによって展示が展開して行く。

開館初日、涙を流しながら「残してくれて、ありがとうございます」と来館者から頭を下げられた。このときほど、博物館が市民、来館者に愛されていて、博物館の役割の大切さを痛感したことはなかった。

震災で途切れたように思われていた陸前高田の歴史が、展示をとおしてずっと続いていくことを改めて感じていただけたことが、新しい博物館が震災前の博物館から受け継いだものである。



がれきの中に残された1枚の書置き

おわりに

「ここには陸前高田の人々が守り伝えてきたモノがあります。モノには物語があります。物語には人々のココロがあります。モノと一緒にココロを守り伝えていくこと、それが博物館の未来への約束です。」

展示室入口の壁に掲げた言葉である。開館以来、守り続けてきたモノとココロがあの日、大津波によって博物館ごとばらばらになってしまったが、全国の支援により再び、モノとココロを未来へつなぐ場所としての博物館を取り戻すことができた。心より感謝申し上げます。



海とともに生きる高田の人々の展示

収蔵資料を見つめなおし、新たな視点を獲得

市立市川歴史博物館 学芸員 福島千尋



市川歴史博物館外観



資料の情報を記録していく



水車を一部外して、刷毛などで表面のほこりを取り除いている

寄贈の提案をいただいても当館の収蔵方針などの事情からお断りすることが年々増えている。

中には「子どもたちの地域学習に活かせたら」と、かつて使用していた生活道具が寄贈されることも多くある。そうした資料は小展示のほか、毎年秋から冬にかけて開催している学校連携学習資料展示『発見・体験昔のくらし』で展示し、市内の小学校が団体見学に来た際には当時の暮らしを伝える大役を担ってくれている。当館は収蔵資料や展示、教育普及等多くの場面において市民に大きく支えられている地域の博物館である。

開館40年を超える地域の博物館の理想とジレンマ

開館40年をすでに迎えている当館の収蔵庫には、同じく約40年分の収蔵資料が保管されている。しかし生活道具をはじめとする民具は、時代が進むごとに収蔵すべき資料が増えていくものである。市民のかつての暮らしを知ろうと重要な資料となるため全てを保存したいが、限りある収蔵スペースを考えると、

また当館が主に民具資料を保管している第一収蔵庫には、棚に入りきらずにやむを得ず床に安置している資料もある。一方で収蔵庫内にはデッドスペースのある棚も散見され、まだ棚に保管できる可能性も秘めていた。そこであれば棚を整理することでやや雑然とした収蔵庫に少しでもスペースが生まれ、新たに資料を収蔵することができるようではないか。加えて学芸員の世代交代の中で情報がスムーズに引継ぎできなかった資料も多々あり、1万点を超える収蔵資料の現状を全て把握できているとは言い難い状況でもあった。その上で、各資料が収蔵庫の中で現在どのような状態なのか等の点検も急務となっていた。

しかし職員数が決して多くないことや、近年は特に展示や教育普及など「活用」を押し付けた事業が増加したことなどが重なり、博物館の役割である「保存」「保管」のバランスが崩れているのも事実であった。おそらく多くの博物館が同じようなジレンマを抱えているだろう。日々の業務の中で担当学芸員のみでこうした作業を行うことは非常に難しく、加えて民具には大型資料も多数あり、扱いにはある程度のノウハウも必要になってくる。やみくもに増員すれば成せるものでもないという点が収蔵庫整理に対する高いハードルとなっていた。

市立市川歴史博物館（以下、歴史博物館）は千葉県市川市の北部に位置し、1982年に開館してから40年以上が経過した博物館である。近くには堀之内貝塚に隣接して市立市川考古博物館もあり（1972年開館）考古博物館が原始から古代を、歴史博物館が中世から現代を担当している。市川市は、歴史博物館が担う中世以降に着目すると、北部には梨づくり等の産業や市指定無形民俗文化財の「御奉謝」、中部には葛飾八幡宮や法華経寺、南部は徳川幕府の保護下で発展した製塩業やその後の海苔養殖、神輿が登場する祭礼など、市全体で様々な特色を持つ。

当館の常設展示室は「第一室 中世以降の市川」の通史展示から始まり、「第二室 海辺の人々の生活」・「第三室 水路と陸路」・「第四室 台地の人々の生活」・「第五室 郷土コーナー」というテーマ展示で構成されている。加えて近年は、季節やトピックごとの小展示も積極的に開催している。その他ワークショップやイベントも定期的に実施しており、博物館ボランティアの協力を賜りながら市民の方々と交流の場としている。

当館における収蔵資料のほとんどが市民からの寄贈であり、

市川歴史博物館第一収蔵庫整理作業の開始

そこでお声がけいただき、令和6年度（2024）から國學院大学観光まちづくり学部を中心とした学生と当学部の石垣悟准教授の協力を賜り、これまで当館において長い間着手が困難であった大規模な収蔵庫整理作業を開始することとなった。当事業について、この場をお借りして紹介したい。

民具を扱う作業に興味のある学生と当館学芸員が協力して、当館第一収蔵庫の棚や資料の清掃・測量が済んでいない資料の記録・資料の現状調査（展示することが可能か等）及びそれらのデータ入力・写真撮影を複数回に分けて実施した。初年度である令和6年度は大型の農具と、当館常設展示でも登場する、市の特徴的な生業であった製塩道具から着手することとした。

参加学生の中には、別の自治体で民具整理を経験した者も何名かいた。作業中には、学生が清掃している資料に対して「どう使うものなのか」「墨書や焼印があるときには「何と書いてあるのか」といったように自ら質問したり調べたりするなど、作業を通して学んでいる姿がよく見られた。主催している我々にとっては学びの場と捉えてくれることを大変

ありがたいと思うと同時に、この収蔵庫整理作業が実践を通じた学習機会としての役割も担うことを実感した。また学芸員は普段資料に見慣れてしまっていることから、見落とされがちな部分に学生が疑問を持ち取り上げられることで多くの発見があった。学芸員も歴史博物館が収蔵資料を改めて見る貴重な機会になっていった。

収蔵庫整理作業をした先に

そうして当年度の作業成果報告展示として『見つめなおす、市川の宝物』を開催した（期間：2024年9月26日～12月27日）。展示資料の選定や各資料のキャプション作成などを学生と共同で行い、結果として様々な狙いを持った展示となった。1つ目は、市民の方々に収蔵庫の現状と当館が学生と協力して実施した当事業について知ってもらいたいこと。2つ目は、当館においていわゆる「死蔵」状態になっていた資料を表に出す機会としたいこと。そして3つ目は、新しい視点で資料を見てもらいたいことである。

市立市川歴史博物館

千葉県市川市
堀之内2-27-1



詳しくはこちら

博物館情報



令和6年度収蔵庫整理作業成果報告展示



各棚に入っている資料の収蔵番号を記録しながら、きれいに戻していく

展示を通して市民のかつての暮らしや生業をあらわす資料を新たな視点で見たい、そうした意味で「見つめ直す」という言葉を用いた。近年、ようやく様々な博物館における収蔵庫問題が取り上げられるようになってきた。長年多くの学芸員の懸案事項であったこの課題に対して、先人たちは様々な苦悩と決断、創意工夫をもって向き合ってきたが、なおも考え続けなければならない問題となっている。博物館が多く開館した時代から40年、50年という節目を迎えようとして、さらに学芸員の世代交代によって若手の学芸員がこの問題に直面しているところも多いだろう。収蔵庫問題は、いよいよ目を背けることができないうところまで来たように感じられる。

これまで述べてきた当館の収蔵庫整理作業は、あくまで収蔵庫問題に対する一つの事例である。事業はまだ開始したばかりで試行錯誤の繰り返しであるが、市民から寄贈いただいた資料を適切に保管し後世に残していくため、博物館と学生双方にとって良い方向へ進むことができるように常に考えていかなければならないと強く思うのである。

入試日程

◆令和8年度(2026年度)一般選抜入試

| 入試制度 | | 出願期間(消印有効) | 試験日 | 合格発表日 |
|-----------------------|-------------------|----------------|--------------------|---------|
| V方式:前期(大学入学共通テスト利用入試) | | 1/5(月)~1/16(金) | 1/17(土) 1/18(日) | 2/14(土) |
| A日程 | 3教科型 | 1/5(月)~1/22(木) | 2/2(月) | 2/14(土) |
| | 最高得点科目重視型 | | 2/3(火) | |
| | 学部学科特色型・英語外部試験利用型 | | 2/4(水) | |
| B日程 | | 1/5(月)~2/20(金) | 3/2(月) | 3/11(水) |

◆令和8年度(2026年度)特別選考入試 (V方式・A日程受験者対象)

| 入試制度 | 試験日 | 出願期間(消印有効) | 合格発表日 | 入学手続期間(消印有効) |
|---------------|--------|----------------|---------|-----------------|
| 観光まちづくり学部特別選考 | 書類選考のみ | 1/5(月)~2/20(金) | 3/11(水) | 3/11(水)~3/18(水) |

入試のポイント

1 一般選抜では2つの日程で「英語検定試験」を利用することができます。

| 制度 | 利用方法 |
|----------------|--|
| A日程(英語外部試験利用型) | 出願要件として利用 本学独自の「外国語」試験が免除され、2科目での受験が可能 |
| B日程 | 「外国語」を試験科目に含むすべての学科において、英語検定試験のスコアを得点に換算して利用可能 |

2 観光まちづくり学部特別選考を実施

令和8年度V方式またはA日程において、観光まちづくり学部 観光まちづくり学科を受験した者を対象に、以下3点の総合評価によって合格判定を行う入試制度。一般選抜入試の成績だけでなく、学びへの興味・関心や学修意欲も評価。

【選考方法】①志望理由書(700~800字) ②V方式またはA日程の成績 ③調査書

入試検定料

応援割(入学検定料割引)を活用して、おトクにチャンスを広げよう!

複数の制度を同時出願した場合、入学検定料が割引になります。下記のケースを参考にしてください。

CASE.1 「共通テスト利用」を中心に受験を検討したい

| | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|-----|---|--------------------------|-------------|
| V方式 | + | V方式 | + | V方式 | = | 合計 54,000円 38,000円 | 16,000円の割引! |
|-----|---|-----|---|-----|---|--------------------------|-------------|

CASE.2 「共通テスト利用」に加え、A・B日程でも受験を検討したい

| | | | | | |
|-----|---|-------------------------|---|--------------------------|-------------|
| V方式 | + | A日程 2/2・3・4 のうち1日 | = | 合計 53,000円 43,000円 | 10,000円の割引! |
|-----|---|-------------------------|---|--------------------------|-------------|

CASE.3 A・B日程を中心に「共通テスト利用」での受験も検討したい

| | | | | | | | |
|-----|---|----------------------|---|---------------------------|---|--------------------------|-------------|
| V方式 | + | A日程 3教科型 (2/2) | + | A日程 最高得点科目重視型 (2/3) | = | 合計 88,000円 63,000円 | 25,000円の割引! |
|-----|---|----------------------|---|---------------------------|---|--------------------------|-------------|

國學院大学の応援割!

- ◆V方式(大学入学共通テスト利用入試)は、通常検定料18,000円が、2出願目以降は1学科(専攻)につき10,000円になります。
- ◆A日程は、通常検定料35,000円が、2出願目以降は20,000円になります。
- ◆V方式(大学入学共通テスト利用入試)とA日程を同時出願する場合も応援割が適用され、その場合の検定料はV方式13,000円+A日程30,000円となり、合計43,000円となります。

試験会場

A日程は東京以外でも受験可能!
自宅に近い場所で安心して受験できます

A日程は本学試験場のほか、地方8会場(札幌、仙台、新潟、長野、静岡、名古屋、大阪、福岡)でも受験可能です。



公募制自己推薦(AO型)の出願は
2025年10月3日に受け付けを終了しました。



観光まちづくり

第5号

発行人 西村 幸夫
編集人 楓 千里
編集 石垣 悟
小林 裕和
椎原 晶子
南雲 勝志
編集協力 相道 なぎさ
(地域マネジメント研究センター)
大隅 一志
(地域マネジメント研究センター)

アートディレクション
大森 慎也
(株式会社光陽社)
デザイン 児玉 陽子
(cota design)

校閲 株式会社ぶれす

発行 2025(令和7)年11月1日

発行所 國學院大学
観光まちづくり学部
〒225-0003
神奈川県横浜市青葉区新石川 3-22-1
電話 045-910-3800
cmi@kokugakuin.ac.jp

印刷所 株式会社光陽社

© 國學院大学 2025
本誌掲載の記事・写真の無断転載及び複写を禁じます。

観光まちづくり学部WEBサイトのご案内

観光まちづくり学部について、ホームページで詳しく紹介しています。また、専任教員が専門分野や学生への期待などを動画で語っています。以下からご覧ください。

観光まちづくり学部
ホームページ



観光まちづくり学部
専任教員動画



観光まちづくり学部公式X
もぜひご覧ください。学内の
イベントやゼミや学生の
活動をアップしています。



観光まちづくり学部 GUIDEBOOK 2025
「地域の夢」全ページ公開!

本学部のカリキュラムの詳細や、1~3期生によるゼミや講義・インターンシップ体験・学生生活・海外スタディーツアーの紹介、学生が製作したたまプラーザ周辺オリジナルMAPなどをまとめたガイドブックを、WEBで公開しています。奨学金などの学びのサポートやたまプラーザキャンパスの施設紹介なども詳しく掲載しています。以下からご覧ください。



*本冊子はWEBでもご覧いただけます。

(現在は3・4号を掲載中。
本号は2025年12月上旬
掲出予定)

3号▶



4号▶



國學院大学の
受験生WEBサイトを
確認しよう!

ここから
アクセス



受験生向けサイトを中心にオンラインでの情報発信を行っています。

動画コンテンツ配信 大学の基本情報や、入試説明、学部学科の学び、模擬授業などを公開中。

バーチャルキャンパス 渋谷・横浜たまプラーザキャンパスを360度でご覧いただけます。